

ふんぎの風

第65号 (2011年10月)

風に吹かれて (44)

白井啓治

『名月も熱帯夜に汗を流して虫の声』

熱帯夜に中秋の名月かと溜め息を流している。次は台風である。台風が過ぎると一気に10℃以上の気温差となり体がついていけない。汗を流して力なく鳴いていたはずの虫達の声が途端元気になる。歳をとってくるとこうしたいきなりの気温差はついていくことが大変であるが、暑いよりは寒いぐらいの方がありがたい。

さて、9月末の定例会の時に演出家として、識者と賢者の指摘の違いについて少し話をした。

『識者としての演出家は、俳優さんの間違いだとか未熟な点といった粗(弱点・短所)を探しそれを指摘して、演技レベルの平均点を上げようとする。しかし、その俳優さんの平均点が上がったからと言ってその作品の質も上がるのかというかと決してそうではない。勿論、見かけの良さは上がるのであるが……。それに対して賢者としての演出家というのは俳優さんの良いところを誉めてさらに伸ばすことを考える。俳優さん個人個人としては凸凹となり平均点は下がるが個性的な面白い作品をつくる事が出来る』と。

演出家の仕事という作品の阻害要因となる問題点を指摘することのように思われているが、決してそうではない。勿論、演出家であるからその作品を通して表現しようとしている事を阻害するものは断固排斥することは言うまでもないことである。しかし、そのことと俳優さん個々の粗探しをして指摘する事とは全く意味が違うのである。

演出家というのは、気性はかなり短気ではあるが、目先の作品だけの完成を求めると言った短気さはあまりないと言える。現作品だけでなく自身の作品の完成を目指しての長期的展望も持つて現状に当たっているものである。だから当面する自分自身の大問題というのは、自分自身の描いている理想の作品への人材育成であるとも言える。実際の所、ミスキャストだなど思っている、このところを少し直させればまあ取り敢えず見られるようにはなるか、という事はある。それは商売だからやらないわけにはいけないのであるが、それが演出というものの本体であるとは思ってもらいたくない。

なぜこんな話をしたのかというと、「ここを少し直せばまあ取り敢えず見られるようになるか」という事ばかりを知りたがったり、それを教えてくれるのが指導者だと錯覚を起している人のあまりに多いからである。

一番困るのは文章である。何処をどう直せばいい文章になりますか、である。だがそういう文章は何処をどう直しても良くはならない。芸術事の全てがそうであるが、自己表現は自分自身が掘り起しそれを表現する必然性を自分自身で知る以外方法はないのである。少し難しい言葉に置き換えたからと言って文章がよくなるはずはない。

良い言葉が探せない、とも言われる。良い言葉ってどんな言葉なのだろうか。もしそんなものがあつたら私に教えてもらいたい。台本を書くのが随分と楽になるだろうと思う。

言葉が探せないというのは、自分がどんなことを書こうとしているのかを追及していないからに他ならない。小学生の語彙であつても素晴らしい表現が出来る。小学生の語彙ならば、全員が持っている。

『あのさ。カエルってゲロゲロって鳴くんじゃないよ。ガルガルって鳴くんだよ』

こうした子供の文章は自分の気になった事を一生懸命観察した結果の表現だから誰も文句は言えないし、その子らしい素晴らしい表現である。このように自分の表現しようと思った対象物に対して観察もしないでうまい文章を書く秘訣は、何てことを聞かれたくない。よい文章の書き方を聞く人というのは「カエルはゲロゲロ」と鳴くものだと勝手に決めつけて、カエルの鳴き声を意識して聞いた事がない人である。

昨日のこと、こんな話しを聞かされた。人を呼ぶことを考えないと町はダメになる、と。だが、人を呼ぶことを考える前に人を呼べる、人を呼んでも大丈夫な準備を考えることが重要なのではないだろうか。本当にどこかおかしいよ。

少し話が逸れるけれども、順序として古代の常陸国について触れておきたい。先ず、律令制の当時は道州のように諸国が区分されており平城京、平安京周辺(畿内)から東へ「伊勢、伊賀、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、武蔵、安房、上総、下総、常陸」の十五か国が「東海道」と呼ばれていた。東海道諸国を結ぶ官道(東海道)が常陸国府まで延びていて、多分、このコースが、完成した大和王朝による初期の主要な東国支配の経路であったと推測する。

また東海道に被さるるように「近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、陸奥、出羽」の諸国が「東山道」として置かれ、胆沢城の先まで官道(東山道)が延びていた。この道は次第に恒常化した蝦夷征伐の軍道になっていたのであろう。常陸国は大和朝廷が東北地方を支配するための支社となり、かつ征服事業を後方支援する基地でもあったのか? 常陸国風土記が編纂された時代については諸説あるようだが、公正証書では無いから大雑把に言つて藤原宇合が常陸国守であった養老年間(西暦七百年代の初め頃)と理解したい。さらに書かれた内容は「古老の相傳ふる舊聞(おきなのおつたるきゅうぶん)」が主であり内容が曖昧でも仕方が無い。聞かれた古老が呆けていなかった保証もないから、無責任なようだが、専門の学者ではない私たちは書かれたことから類推して当時の実像らしきものを頭に描いてゆくしかない。

「常陸国風土記」については終戦後から河野辰男先生(県立谷田部高等学校長)が研究をされ、それに武内藤男県知事、県教育庁、県歴史館などが協力

し、昭和五十二年の初めに「常陸国風土記史的概観」が出版された。一般には知られていなかったが、幸いにして河野先生の御実弟の後輩が私の友人だったので入手出来た本である。

その本の中に縄文時代、弥生時代にかけて常陸国に伝播した文化の経路が推定されており「石器」のうち、狩りに使う「石鏃(矢じり)」の原石となる黒曜石のルートが示されている。原産地である諏訪湖近辺から北・中部関東に運ばれた道が元になって「ふるさと風」第五十一号に鈴木建先生が書かれた「新治 筑波を過ぎて……」で日本武尊がクイズを出した道が出来たのである。

このコースが原初の東海道と思われ、駿河から甲斐、伊豆、相模、武蔵、下総と抜けて来る。「常陸国風土記史的概観」に依つて類推してゆくと原初の時代に常陸国へ入るには黒曜石のルートで筑波山南西麓に達するか、日本武尊のように下総から船路で流海へ入ってくる。大和朝王朝から派遣されたか、自分たちの野望かは知らないが、最初に陸路を来た出雲系や物部氏らの探検隊が筑波山を前にして「どうすべきか?」を考えた。物好き派は現地に留まって「新治国」を開発し、満足しない連中は山脈に沿つて北上するか、河川地帯を戻つて下総の国に行くしかない。北上した組は笠間から那珂川に出て、水戸近辺を拠点に「茨城国」「那珂国」「多珂国」「久慈国」を開き、さらに海岸回りで行方、鹿島に進出したと推定できる。

南下した組は湿地帯(河川地帯)を越えて下総に入り、さらには流海(霞が浦)を見つけて驚き、特に沿岸地帯の豊かな暮らしに仰天する。香取神社を祀つたのも、日高見国を発見し、陸路海路を利用した東海道を思いついたのも、こいつら(適当な敬

称が見つからないので失礼)の仕業であつたと思つたのだが……そのお蔭と言えるのかどうか、東国への道はクイズ街道から日高見街道に変わつていったものと推定している。

代表的な古事記による日本武尊の東征経路では先ず伊勢神宮で坐女をしていた叔母さんから武器か資金を借りた。神宮の創建年代は古いが伊勢の地に遷つたのは天武天皇時代とされるから、西暦六百七、八〇年代のことになる。これで「歴史の嘘」が判つてしまふけれども、それを言うとき戦中派の方々から睨まれるから二百年、三百年は問題にしないことにして、日本武尊は尾張に居た愛人の家に寄り、そこから神奈川県に来て静岡県にある焼津の港へ寄つた? ……おかしい話だが古事記に従うと、そのようになり昔の日本では、それを政府が国民に信じさせていた。さらに浦賀水道を船で房総半島に渡つたのだが、狭いと思つていた海は意外に広くて、途中で天候が変わり大シケになった。その時に日本武尊の正室だか側室だかの橘日売が犠牲になつて海に飛び込み海神を宥めた。そのお蔭で一行は無事に上総国(千葉県中央部)に着くことが出来たのである。

さて、そこらが問題で古事記には「そこより入り幸でまして、悉に荒ぶる蝦夷どもを言向け、また山河の荒ぶる神どもを平け和して……」としてあるだけで、「何処へ行って、どういう作戦で、どういう賊を退治したのか……」とは書いてない。昔の漫才で舞台に出た途端に「……早く帰ろうよ!」と言つて客を笑わせたコンビが居たけれども、日本武尊の東征も常陸国から甲斐の国へ行き「幾夜か寝つる……」と、旅館の仲居さんが言うようなセリフを残したことだけが丁寧に記録されていて、

武将としての肝心なことが抜けているのである。

もう一つ、辻褄が合わないことは、日本武尊が甲斐の国で詠んだ歌の文句である。「新治、筑波を過ぎて…」とあるが、新治国は文字通り新たに開発された土地であり場所は筑波山の北から西にかけて、現在の桜川市を中心とした地域と想定されている。此処は初期にやって来た出雲系武将が開発した国(郡)と言われる。日本武尊は、其処から甲斐の国まで幾日かかったかと尋ねた。つまり日本武尊と言われる誰かが常陸国へ来たのは東国が中央政権の支配下に入ってからのことになり伝説として残る冒険的遠征物語は嘘である。

日本書紀のほうは少しましで「上総より転(うつ)りて陸奥国に入り…」とあるのだが、難しい漢字が並んでいるのを適当に解釈すると次のようになるから、陸奥国へ行った記録はない。

「時に大鏡を王船に懸けて海路に従い葦浦に廻り玉浦を渡り蝦夷との境に至る。蝦夷の賊の首(かしら)嶋津神・国津神ら竹の水門に屯(たむろ)して距(ふせがむ)と欲し、遙かに王の船を視て、豫(あら)早くもその威勢に怖れ、心中に勝つべからざるを知り、悉く(ことごとく)弓矢を捨て王船を望み(見て)之を拝す。船上に日本武尊を見れば、その容(顔形)、人に勝れ、只人にあらず、若しや神かと思えど、皆、其の姓名を知らず。

是に對して、王(日本武尊)は答えて曰く。吾は是れ現人(あらひと)がみすなわち神の子なり。

ここに於いて蝦夷ら悉く慄然(かしこまり)て、裳(着)衣の裾をかかげ波を分けて王船に近づき扶(たす)けて船を岸に着けし。依つて其の罪を許し首長を俘(ふ)人質として仕えさせしむ。蝦夷、既に平ぐ。日高見国より還り、西南・常陸を経て甲斐国

に至り、酒折宮に居る…」

この記事が真実かどうか、確かめようがないが自分のことを「神の子なり」と言うのは神様に失礼であるし、最初から服従している人々に對し「その罪を許し…」とは思いがりも甚だしい。いずれにしても、武内宿禰が余計な事を進言したから日本武尊などと名乗る新興勢力が東国に入り込んで来たことは間違いない。そのコースは日本書紀に記録されているが「葦浦、玉浦、竹の水門」の場所が現在の何処になるのか、皆目、見当がつかないのである。概して地名は形を変えても残るものであるが、近代は地方自治体の暇な役人が、自分の功績を残す目的で、やたらと町名変更などをするから、古来の地名が消えてゆく。辛うじて「上代王朝史」に葦の浦は安房国の海岸、玉の浦は匝瑳郡の九十九里沿岸地帯、そして竹島は常陸国新治郡と推定した記事があった。

これだと、船で来た日本武尊の一行は浦賀水道から外洋を回って流海(霞が浦)に入ったことになる。それはそれで構わないが、船で来たのに帰りは陸路になった訳であるから船はどうしたのであるうかと、余計な心配をする。そして鏡を見たところが無い蝦夷の人々が、船の舳先に付けられた大鏡を見て侵略者・日本武尊を神様と間違えた場所が常陸国の旧・新治郡内にあった「竹島」ということになる。そこは何処なのか? 具体的な場所は探しようがないけれども、古代の海の沿岸部であったことは確かである。そして武内宿禰は「撃ち滅ぼすばし」と余計なことを言ったが、地元の人々は神様に抵抗は出来ず、あっさり服従してしまっただから、日本武尊も乱暴はしなかった。

上代王朝志には、此の時に日本武尊が鹿島に建

御甕槌命(建御雷命)を祀り、香取に経津主神を祀ったとしている。哲学者であり歴史学者でもある梅原猛先生は「この両社は物部氏が祀っていた神を大化の改新以後に藤原氏が取り込んだ」と、推定された。私は「神の子である」などと法螺を吹く日本武尊よりも梅原先生を信用する。

船の舳先に飾った鏡を見て、古代の善良な人々は簡単に騙されてしまった。日本武尊が「新治、筑波を過ぎて幾夜か寝つる」間に「あいつは神様でも何でもない。只の侵略者である!」と気付いても既に遅かったのである。こうして出雲系、九州王朝系、物部系などの諸将が開発した常陸国のさらに中央部が中央政権の支配下に入るようになり以後、宝の国である常陸国には次々と官僚が送り込まれて来たのであろう。そして都からは山間部を経由しない東海道が通じ、常陸国は中央政権が東北を抑えるための重要な基地になった。

時代は飛んで、小田原北条氏滅亡の後に徳川家康は豊臣秀吉の嫌がらせで故郷の三河から関東へ移され、それを逆手に取って太田道灌が築いた江戸城を拠点にした。そのため常陸国は東海道から切り捨てられた形になってしまったのである。

徳川幕府が公式化した街道は江戸を出発点とする「東海道、中仙道、甲州街道、日光街道、奥州街道」の五本であり、これを「五街道」と称した。西国には「山陽道」だけである。常陸国内に延びていた旧東海道の部分は五街道に次ぐ「脇往還」の「水戸佐倉道」に格下げされた。しかし一般的には「水戸街道・尿前越(しとまえごえ)」と呼ばれ千住から水戸経由で宮城県鳴子温泉回り、奥州街道に接続していた。奥の細道にある芭蕉の句:

「蚤虱(のみしらみ)馬の尿(しと)する枕もと」尿前

は鳴子の先、道とは名ばかりの山中である。

常磐線は上野駅を出てから多くの鉄橋を渡る。河川が多く京浜地帯の海岸線は現代より深く入り込んでいた：室町時代末期の江戸（越）は海辺に在ったらしく太田道灌先生が詠んでいる。

「我が庵は 松原続き 海近く 富士の高嶺を 軒端にぞ見る」

そのため、昔の東海道は山の手寄りに通じていたのか。又は日本武尊のように外房を回ってくるのか或いは三浦半島から房総半島へ渡り、現在の利根川が流海の一部であれば千葉県の印西辺りから狭い部分を渡り榎浦津に入る。船便が鹿島にも通じていたようであるし、陸路だと美浦村を縦断する形で今の湖岸に出る。そこからは船で出島に渡り、さらに高浜港へ着く。流海が退潮し陸路が整備されるようになると街道は現在の六号線に近い位置に定まったと推定されるが、古代の常陸路では信太の郡が街道の要衝に位置していた。そのため筑波郡、茨城郡から戸数七百を割いて信太郡を新設したのであろう。そして、その地は、さらに古代には「日高見国」と呼ばれていた。

「常陸国風土記史的概観」には信太郡の命名由来として派手な葬式をして貰った黒坂命の墓（古墳）が美浦村大塚にある（墳頂に黒坂神社を祀る）ことが記されており、それによるとこの人物は藤原宇合の同族とされる多（大）臣系中臣氏の一族らしい。そのため常陸国風土記では東北三大祭の宣伝かど錯覚するような「赤旗、青幡」の記事で一族の功績を称（たた）えた。しかし人間は嘘をついても何処かで真実がポロリと漏れるものでこの記事が図らずも「日高見国」の本来の姿を後世に伝えることになった―藤原一族としては日高見国など、ど

うでも良くて中臣氏の祖先の活躍だけが伝われば良いと思っていたのであろうが…。

藤原宇合にとつては中臣氏の功績が後の世に伝われば目的が達せられる訳であるから、黒坂の命の葬式が凱旋將軍のパレードのように豪華華麗であったことを記録した。サービスで「信太の国」の名称の由来まで付け加えて…これで満足した。そして黒坂の命は美浦村大塚の古墳に埋葬されたのである。本来、戦死した武將は現地に葬られる筈であり仁徳天皇の五十五年に北茨城の「鶉の岬」付近の戦場で戦死した「田道」という武將は現地の古墳（虎塚古墳）に葬られた。それを大蛇が守った話が日本書紀の十一巻に載っている。

作り話だとは思いますが…紹介すると、日本武尊の孫に当る仁徳天皇の時代にも上毛野君の祖になる竹葉瀬という武將が新羅国（朝鮮）に出陣し白い鹿を捕まえて天皇に献じた。竹葉瀬は新羅軍と戦い、その際に弟の「田道」が活躍をした。数年後に蝦夷が背いたので、天皇は田道を遣わしてこれを討たせた。場所は「伊寺（いじ）の水門（みなと）」である。此処は北茨城市の伊師浜に擬される。激戦が展開され、田道は戦死したが、蝦夷軍が優勢で田道の遺体を収容することが出来ない。そこで家来は田道が腕に巻いていた飾り（手纏てまき、数珠のような飾り）を外して持ち帰り「遺品」として田道の妻に渡した。妻は悲嘆のあまり、遺品を抱いて自殺したので妻と遺品とは田道の墓に埋葬された。合戦が収まってから何年か経ち、原住民が古墳を荒らしにきて中に侵入した。内部には武器、武具が納めてあり黒漆塗りの太刀や鉄の鍔などが在ったが、それを持ち出そうとした者は、内部に居た大蛇の毒に当てられて命を失ったと言われる。古

ふるさと風の会会員募集中!!

当ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

墳の内部には幾何学模様の壁画が描かれており、それが大蛇の目に見えたので、侵入者は古墳内に溜まったガスでやられたのである。

この話は仁徳天皇時代とされるが、古墳の築造年代は七世紀前半と推定されている。丁度、蘇我王朝から大化の改新にかけての時代である。その時代に、いわゆる蝦夷の人々は常陸国から東北地方に追われていたことが推測できる。そこから考えれば、日本武尊の名を騙った人物や、黒坂の命なども、それ程に古い時代の武將では無い。

黒坂の命の遺体は特別扱いで現地には埋葬されずに「信太の国」まで運ばれた。それだと「信太の国」日高見の国」は、日本武尊のように東国に進出したと言うか、侵略して来た勢力が新たな国土を統治するための出先機関として重視していた場所であることは間違い無い。そして日立市に残る「日高」の地名を考えれば、初めは信太郡の狭い範囲につけられていた「日高見国」の名称が、侵略して来た勢力の北上に伴って徐々に陸奥国へと拡大していったつまり、北方蝦夷防衛の拠点が自動的に北上していったことが推測できる。東北地方を「日高見国」とする説も、その延長線上にあるのではないか？とは言うものの「日高見国」についての資料は極めて少ない。

名称が現れる資料を列記すると「日本書紀」「古事記」「上代王朝志」「常陸戦蹟」「常陸国風土記の史的概観」などであるが、いずれも蝦夷が平定された地名としか記録されていない。大和王朝圏の拡大により何時の間にか「日高見国は日立近辺である」とか「仙台平野である」とか「北海道の日高平野である」という説が生じてきたのである。

素人が生意気なことを言うよう気が引けるのだが、不思議なことに「日高見国」の話題の中では論理の発展が無いと言うか、場所を論じるだけのことで終わっている。尤も知りたいことは場所も勿論ではあるが、日高見国が歴史的にどのような役割を果たしたのか、なぜ日高見国と呼ばれたのか：などであろう。それに答えてくれるものが暫くは見つからなかった。

そうした中で入手したのが「東北地方の文化」をテーマにした或るシンポジウムの記録資料である。入手と言っても、一連の資料は一九八〇年

代から九〇年代にかけて出版されたもので実は発刊当時から知人に頂いて、私がついていながら日高見を知らず「つんどく」したものである。

典型的な爺さんである私は、自分が好むこと以外に全く興味が無い。新聞なども政治家の名前や株価などが出てくる頁は飛ばし読みしている。歴史のことでも、具体的な人物が来てくれないと満足しない。今回は日高見国を探って頭痛薬を飲みながら「つんどく書庫」を見直したところヒントになる答えが有った。さらに同時代に出た歴史雑誌を確かめたところ、いずれも最初のほうで紹介した東北大学名誉教授（当時）の高橋富雄先生が「日高見国は常陸国信太郡説」を強く主張しておられる―やはり常陸国の、それも敵か味方か、凶々しくも神様の名を騙って突然にやって来た侵略者が上陸した場所が「日高見国」なのであり、現代に残る地名で言えば美浦村周辺の「信太地方」しか該当しないことになる。

当然ながら侵略してきた西の方の勢力が、是を例えば「やまと」と称した場合に、征服させられた勢力は「賊」「夷」「蝦夷」などと呼ばれるが、其の人たちが住んだ「国」が「日高見国」になる。

東の国を含めて国造（くにのみやつこ）制度は比較的に早い段階から施行されていたようであるが、街道も未だ整備されていない時代には中央の威光が地方には及ばない。古事記にもあるように日本武尊を苦しめたのは蝦夷や国舅だけでは無くして既に土着していた国造など地方行政官の離反なのであり、昔も官僚の質は良くなかった。

日本武尊が東国に派遣されることになったのは景行天皇から「東方十二道の荒ぶる神、また伏（まつらぬ）人どもを言向け（ことむけ）和（やわ）せ」：

説得せよ！と命じられたことである。話し合いだけでは済まないことが十分に考えられる。合戦に依る犠牲を覚悟していた侵入者には、戦わずして従った豊饒の海を控えた大地は煌めいて見えたことであろう。折から東の空には鹿島灘から昇る太陽が、自称・神の子を祝福するように照り輝いていた。一方、土地の人々は、見たことも無い大きな鏡を舐先に付けた船が太陽を受けて輝く様子を何とも神秘的に見立てたのである。「日高見国」という名称の由来は案外と、そういう素朴な感覚から出たものと推定している。

古事記、日本書紀によれば日本武尊は日高見国を従えたあと、自分はサツサと帰ってしまった。

勿論、担当の官僚が残って、此の地方の開発事務を処理したのであろう。日高見↓日高見道↓日高道（ひたかじ）↓ひたかち↓ひたち（常陸）の名称変化が想定されている。つまり、日高見国こそ後に日本六十八か国のなかで最高の三か国となる常陸国の原点なのである。高橋先生のお説では、

さらに「日高見」が大和政権に組み入れられたことにより「大倭」大和（おやまと）の概念が生じて、それが「ヤマト」日本」の国号になったという。日高見は日本である。ただし日高見国は、大和王朝が支配した国では無く、あくまでも「蝦夷」と呼ばれた日本先住民族の国である。先住とは先に住んでいたことであるから、それで良いのかも知れない。やがて、大和王朝の支配地域が拡大して「日高見」の名は北へ北へと広がった。

日本の歴史は、中近東、中国、西欧諸国の歴史と違って何でも神様の所為にしてきた関係で年代感覚が曖昧になる欠点がある。国家が形成された初期の段階で記録すべき「国の文字」が無かった

から都合の悪いことは神代のごとで誤魔化せた。そして藤原一族が天皇家に寄生して国家を私物化したから、歴史の真実が全て失われてしまった。そうした中で、真の日本国発祥地とも言える「日高見国」のことが、断片的にでも残っていたことは意義が深い。しかも、その場所に当てはめることが出来る場所が、村民一致で古代からの遺跡を保護伝承している「美浦村」近辺であったというのも感慨深いことに思う。正に諺に言う「天道誠を照らす」である。

「日高見国」から流海を隔てて東には鹿島・香取の両社が祀られている。この二神が居なければ大和王朝は実現しなかった。自分たちの功績を顕すことに気を使った藤原一族は、国家最大の功神であるこの二神を、自分たちの祖神として日高見国の対岸に祀ったのである。

重陽

鈴木健

旧暦9月9日は重陽(チヨウヨウ)。今の暦で今年10月5日、この号がお手元に届くころか。陽とは陽数(奇数)のことで、重陽はその陽数の極である9が重なる意から9月9日のこと。五節句のひとつである。五節句は、原則として陽数の重なる日におこなわれる中国渡来の行事で、人日(シヅツ・1/7で例外、上巳(シヨウシ・3/3)、端午(タング・5/5)、七夕(タナバタ・7/7)、重陽(チヨウヨウ・9/9)、ということになるが、1/7の人日はなじみがない。それは、元日は鶏の日、以下6日までは狗、羊、猪、牛、馬の日で、7日が人の日

ということによるとか。

中国では、重陽の節句に菊の花を加えて米や黍を醸した菊花酒を飲む習慣があった。日本にも重陽の宴として伝わった。それは宮中で催された観菊の宴で、杯に菊花を浮かべた酒を酌みかわし長寿を祝う、群臣に詩を作らせる、という形にアレンジされた。やがて庶民にも伝わったのであろう。「草の戸に日暮れてくれし菊の酒」(芭蕉)。

この国では、なにかといえれば短絡的に酒が結びつくが、優雅な行事も生み出された。菊が長寿をもたらすと信じられたのは中国の伝説による。美少年の菊慈童は周の穆王に寵愛されたが、一六歳の時、王の枕をまたいでしまい、(そのことから日本の謡曲では「枕慈童」とも)、河南省南陽郡の山中に流される。しかし、そこに生える菊から滴り落ちる水を飲んで数百年の不老長寿を得たという。伝説ばかりではなく、古来中国では菊は薬であった。500年ころの『神農本草経』には、菖蒲について2番目の良薬に菊の花が載っているという。空想的な不老長寿ではなく耐老延年という現実的な効能があり、めまいや眼疾にも効くという。

日本では、平安貴族のあいだで、「菊の着せ綿」という重陽の節句の慣わしが広まった。

前夜に菊の花の上を真綿でおおい、9日の朝に、夜露を吸い菊の香の移ったその綿で顔や肌をぬぐうと老いが去り、命が延びるとされたのである。澄んだ、引き締まった、品のある姿が目に見え、菊慈童の伝えがヒントであろうが、菊の酒ではなく、「菊の露」を自家薬籠中に取り込んだのも風雅と

言うほかはない。

「ぬれてほす山路の菊の露の間に早晚(いつか)千歳をわれはへにけん」(素性法師『古今和歌集』905年)

「九日、菊の綿を兵部のをもとの持ち来て、これ殿の上(藤原道長のとりわきて(特別あなたに)、いとよう老ひのごひ捨てたまへ」とのたまはせつるとあれは「菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじにに千代はゆざらむ」(いただいた着せ綿の菊には、ほんの少し若やぐ程度に袖をふれさせていただき、千年の寿命は花の主のあなたさまにお譲り申しとう存じます)とて、かへしたまつらむとする程に」。このように、紫式部は『紫式部日記』(1010年)の中で藤原道長の妻から、その菊の着せ綿をもらったことを書いています。

『源氏物語』(1007年)でも、「九月になりて九日、綿おほひたる菊を御覧じて、

もろともにおきぬし菊の白露もひとりたもにかかる秋かな(一緒に菊に綿を置いて長寿を祈ったその菊の白露も今年は私ひとりの袂に涙となつてかかる秋であることかな)。光が愛妻の紫の上と共に毎年9月9日に菊の着せ綿で肌を拭い長寿をねがっていたのに、紫の上を失ったあと、途方にくれる姿が「幻の帖」にえがかれている。

清少納言の『枕草子』(1001年)にも「九月九日は、あかつきかたより雨すこしふりて、菊の露もこちたく(多すぎて)、おほひたる綿などもいたくぬれ」とみえる。

「綿着せて十ほど若し菊の花」(二茶)

「秋をへて蝶もなめるや菊の露」(芭蕉)

江戸時代のこれらも、着せ綿の流れである。

時代は変わり明治となる。1873年1月4日の布告により、「今般改曆につき、人日、上巳、端午、七夕、重陽の五節を廃し、神武天皇即位日、天長節の両日を以て、今より祝日と定められ候こと」となった。神武天皇即位は西暦起源の660年前の2月11日とされ、縄文時代に天皇制国家が成立したことになる。その日はのちに、「空にかがやく日のもと、よるずの国にたぐいなき、国のみはしら建てし世を、仰ぐきようこそ、たのしけれ」(紀元節)と、紀元節とされ、現在も建國記念日とされている。1940年は皇紀(天皇紀元)二千六百年とされ、教育と広報を通じて国民に対する徹底的な摺り込みが行われた。「正義りんたる旗の下 明朗アジアうち建てん 力と意気を示せ今 紀元は二千六百年 ああ いやさかの日は昇る」(紀元二千六百年)。天長節(明治天皇誕生日)は後に明治節となり、現在は文化の日と改称された。五節句のうち3/3、5/5、7/7は桃の節句・端午の節句・七夕としてその後も続いているが、重陽の節句は消え失せた。一億玉砕の時代に不老長寿などもつてのほか。年寄りはずまといの役立たず。無駄飯食いの穀つぶし。そのような考えが国民感情をリードしていたのだ。そして高齢化社会の今である。風流な菊の着せ綿が復活してもよさそうだが、今の人たちは関心が無い。蓮作り地域では、美女の手で蓮の葉に酒を入れてもらい、中腰で茎をくわえ、パイプを下ってくる酒をゴクゴクとやることを粋と言うのかもしれないが、私は菊の露に未練を持つ。着せ綿ゆかりのイベントがあってもよいのではないかと思う。折から健康食品がブームだ。商品名は菊の露・菊のしずく・菊の水のどれか、商品はペットボトル入りの天然水、重陽

の節句方式で採った貴重な菊の露を必ず添加し、菊の香もいれる、放射能はゼロ、由緒書きを付け、効能には、飲めば不老長寿にキク、それをひたした真綿での全身マッサージにより美肌効果が期待される等。例えば、菊の花を市の花とし、全市をあげての菊祭りや賑わう笠間市でどれかが試みてはどうか。

その菊のことだが、皇室のシンボルとなっているので、日本固有の花であり、キクと呼ぶのも古代日本語によると思っている人が多い。しかし、意外なことに菊は中国原産、菊をキクと読むのも漢語読みで、日本に渡来しても日本語名はつけられず、そのままキクである。

万葉集には160種あまりの植物が詠まれているがそのなかに菊はないことから渡来はおそらくそのあとであろう。菊の花という用語がはじめて記録に現れるのは794年の事であると言われる。天皇と菊紋の結びつきは鎌倉時代初期の後鳥羽天皇(1183~1198)の刀剣に16弁の菊紋が刻印されたのが始まりとされ、以後天皇ゆかりの紋章として定着したという。「菊は栄える葵は枯れる…」勘太郎月夜唄の一節であるが、幕末の世相を伝えている。1926年の皇室議制令によって天皇の紋章は一六弁八重の菊と定められた。「けだかい花よ、菊の花、あおぐもんの菊の花」(文部省唱歌『菊の花』)、「仰ぐほまれ軍艦旗 みよしに菊を戴いて：伸ばせ皇国(みくに)の生命線」(『太平洋行進曲』)、軍艦の舳先には菊の紋が輝いていた。「恩賜のたばこを頂いて明日は死ぬぞと決めた夜は：」(『空の勇士』)、称揚に激励に、兵士には菊の紋の入ったタバコが与えられた。小銃には菊の紋が刻印されて

いた。その法定紋章はわずか21年で廃止され、今は天皇家の家紋になっている。これも法律上の定めはないが、菊は日本の国花ともされているし、国章の扱いもうける。パスポートの表紙には一六弁一重の菊が使われる。市会議員の先生方の胸にもそれらしいものが輝いている。菊花大綬章もあれば、公認のギャンブルに菊花賞も天皇杯もある。一方、「鉄のカーテン」をもじった「菊のカーテン」という言葉が流行した。なんとも不思議な国だ。

青屋箸(三)

兼平ちえこ

茨城県の年中行事に青カヤの箸でうどんを食べる行事がある：から始まる更科公護著「常陸の青屋箸について」より、民俗行事としての青屋箸について訪ねる事にし、今回は三回目となります。更科公護氏の原文そのままを当会報六四号にご紹介しましょう。

『青屋箸が何の祭りであるかはいずれもはつきりしていません。ところが青屋箸と同じような行事が隣の千葉県下でも相当広く行われている。日は旧の六月二十七日で、「新箸の祝い」などとよばれ、うどんや小麦だんごを作ってススキやヨシの箸で食べている。いわれについては、昔源頼朝が戦いに敗れて落ちてきて、カヤの茎を折って箸を作り、これで昼食をしたのち、その箸を地に逆さにさしておいたのが芽をふいた。などと言っている。

そこで青屋箸の本来本元であるという石岡の総社神社の末社に青屋神社というのがるので総社神社に照会したところ、祭神はウガヤフキアイズ

ノミコトを祀り、産屋の屋根をカヤでふかないうちにミコトが生まれたという故事による安産の祭りだとのこと。(注、青屋神社の祭神は昭和十六年茨城県神職会発行の神社誌には天照大神となっている)こうなるといよ

いよわからなくなってしまうので、とくにカヤの箸で食べるとどんな利点があるかに重点をおいて、まず年中行事として各地で行われているあるいは行われていた青屋箸の実態をつぶさに調べてみた。

調査の結果は、利点については多くの人びとはどんなご利益があるかは知らずに、ただ昔からやってきたからやっているのだと答えたが、少数ではあるが、利点を答えた者は、疫病にかからない。農患いをしない。夏中病気をしない。と言った者がほとんどで、きわめて僅かではあるが、稲がススキのようによくできるためだ。長生きをする。田植えが終わったので、田植中農患いをしなかつたから青屋様にうどんを供えて祭るのだ。と言った者もあった。

行事は、山からススキ(瀬沼地帯ではヨシやガマも用いる)を採ってきて茎で供える箸を作るが、一般には箸は家族全員の分、たとえ生れたばかりの乳児でも、不在の者の分までも作る。土地により、また家によつては青いススキを一升徳利にさして飾つたり、数本のススキの先端を結び、これをサギチョウのように三脚に分けて庭に立て、上にうどんをかけたたりする。また中にはススキをふいて小さな祠を造る家もある。いわゆる青屋である。

供える物は一般にはうどんだが、千葉県に近い稲敷郡あたりでは小麦だんごも作って供える。うどんは昼食に食べるといふ家も相当あるが、一般には夕食に食べる家が多い。そして必ずススキの箸で食べなければならないことになっていて、や

わらかいススキの箸でうどんは食べずらいので子どもはいやがるが、一口だけでも食べなければと、無理にも食べさせられる。

食べたあとの箸はたいていそのままうち捨ててしまうが、竈にくべて燃やすもの、川に流すもの、門口や屋根にさすという例が僅かあった。また徳利に飾つたススキを悪いものが入らないためだといつて、裏口の軒にさしたり、庭にサギチョウに立てたススキを牛馬の厄除けになるといつて、厩に入れるというのが冬一例ずつあった。

なお青屋様の日は、元は多くの家ではたいてい仕事を半日休んだとのことである。

しかし青屋箸の行事については、学界での見解では、和歌山県本部で行われている青祈禱の例をひいて、稲作の安全を祈る行事だろうとのことである。この青祈禱というのは六月丑の日の行事で、丑の日祭りともいい、神社へ行って稲の成育を祈願し、お礼をうけてきて青田の上を振り歩くもので、むしろこれは虫送りの行事にちかく、家族一同がカヤの箸を使うのとはおよそ趣を異にしている。青屋祭には

、稲の成育という意義は調査によつて得たいくつかの事例によつても、ない事はないが、それよりもこの青いススキやヨシに何か問題がありそうである。鹿島誌の青屋のはじめに、「大神に薄の箸を供え奉れり」とあるのも、青屋祭の意義はわからなくなつたとはいへ、ススキの箸には何か深い意味が秘められているように思える。』(次回につづきます)

青屋箸について、意外と多方面で行われていることに驚き、一層の興味が沸きあがってきます。九月の初めの頃でした。隣の小美玉市立延地区

(旧小川町内)に「立延の青屋祭」(市指定無形民俗文化財として地元の子供さん達(男子のみ)の行事として代々引き継がれている事がわかりました。私は以前五年ほど旧小川町内に住んでいました事から、立延の区長さん、郡司様にお会いする事が出来、平成十四年一月、飯田保様編集の「立延の年中行事とその昔」を拝見させて頂くことになりました。

それによりまず立延地区で行われている青屋様は子供達の行事として男子の子供会が中心となつて青屋様(七月二十一日、旧暦六月二十一日)の前日の午後、公民館に集まり、山からススキを取つて来て、地区の全部に配る必要量の箸を作り、翌朝、子供達は手分けして各家々を回つてススキの箸を配り、いくばくかの礼金を頂くようである。

朝食後、前日、山から取つてきたススキで青屋を作り、田んぼを通つて立延下の菌部川へ流す。その昔、農作物の害虫を追いやるため六月末とか土用入りのころ全国的に、虫送りの行事がおこなわれたと言ふ。田の虫は悪霊の仕業と考え、村外へ放逐しようとした。古くは念仏衆の老人たちが鉦や太鼓をたたいて村はずれまで虫を送り出したとか、虫送りの念仏を唱えながら田んぼを回り歩いたとか、これらの行事は急速に消滅したようである。

現在でも引き継がれている子供達が青屋を作つて川へ流す青屋様の行事は、青屋箸に付随した虫送りの行事ではないかと「茨城の年中行事」の著者藤田稔氏は解説しているという。

平成の世にも延々と子供達の手によつて引き継がれている「立延の青屋祭」。頂いた礼金は子供会の年長者が学年ごとに分配するようである。早く分配をする年長者になりたいと願う年少の子供達

が頼もしいと笑顔で話す郡司様が印象的でした。山から頂くススキ、そして心付けを頂くことなど、自然への畏敬の念と社会の規律を学ぶ立延の子供会の皆さんには優しい人の心が宿る事でしょう。

・空遠く 柿の実ほんのり ちえこ

悪魔のオモチャ

菅原茂美

人間は何で、こんなにもロクでもないオモチャを、次々発明するのであるのか？ この度の原発事故や、中国の高速鉄道事故を見ると、しみじみ考えさせられる。

文明発展の歴史を見ると、より高度の大型機械が発明・運用されると、より巨大な事故に繋がる。当然、十分な安全対策は施されているはずではある。しかし、人間のやること。突然、魔が刺したというか、失念の空白が生じ、大事故に繋がる。注意力散漫、整備・チェックの見落としなど：これらが、多くの尊い命を失うことに結びつく。

そして文明の利器は、構造物が大きくなればなるほど、被害は大きくなる。タイタニック号の悲劇・日航ジャンボ機墜落・列車衝突事故・浮かび上がれなくなった潜水艦・地震によるビルの崩壊等。小規模でも、自動車事故など、わき見、居眠り、飲酒運転などで、オモチャは壊れ、人は死ぬ。

ところがウツカリミスだけではなく、悪意に満ちた報復合戦や、大量殺戮などに悪魔が手を染めると、筆舌に尽くしがたい悲劇を生む。運転・運

営する者の心の中に、悪魔が棲んでいると、文明の利器も、凶器と化す。

事故というより意図して起こされた事件の数々。10年前の9・11事件。報復の執念で、乗っ取った航空機をビルに衝突・崩壊の自爆テロ。更に悪意の極限・大量殺戮兵器による戦争。原爆投下等、何十万人も、一度に殺そうとする悪魔の最悪のオモチャ。人間の残虐性丸出しの兵器の数々。

人類は脳が発達してくると、より豊かな生活を願い、発明・工夫を繰り返して、次々と文明の利器を生み出す。しかし、ある意図を持って、捻じ曲げられて活用されると、例えば航空機は爆撃機に、船舶は戦艦になる。そのため、罪のない一般市民を大量殺戮する悪魔のオモチャとなる。

人間には向上心や、社会奉仕の柔和な面は勿論ある。新しい便利な物を造ろうとする人は、目を輝かせ、人類の役に立つようにと、願いを込めて製作したに相違ない。問題は、それを運用する人の心が次第。発明品は、善人が用いれば、人々に快適と便利をもたらす。二輪車は四輪車となり、人力↓畜力↓動力と進化すれば、より大量に人や物が運べる。人々は豊かさを満喫できる。

ところが欲の深い、権力を握った大王とか皇帝とかいうヤカラは、他人のものを、より多く掠め取ろうとする。家来の人命など消耗品と考え、より強力な武器を携え、侵略を繰り返す。洋の東西を問わず、人類の歴史なんて大方そんなところ。

人間には美しい面は多々あるけれど、想像を絶する残虐性もあり、野獣にも劣る卑劣さを強力に印象付けられる。特に私が、カチンと来ているのは、1532年、南米ペルーを征服したスペインの探検家フランシスコ・ピサロ。彼の軍隊はわず

か、180人で、騙し討ちの連続で、インカ帝国をあっという間に滅ぼし、財宝など奪い取った。

ヨーロッパ人は南北アメリカ大陸で9000万原住民の90%を殺害したという。北米で、白人どもが原住民を殺しまくった記録等、伏せて世に表わされなかった。しかし今、動物学的に種の保存などが議論される時、例えば、野牛のバイソンなど、数千万頭が北米に生息していたが、白人の狩猟趣味が昂じ、更にインディアンの食料を断つためにバイソンを殺しまくった。最後の数百頭になつて、やつと種の絶滅に気付いたという。

また、北米の旅行バトは、纏まって渡りをすれば昼間でも地上は暗くなるほどの数であったが、これもインディアンを餓死させるため殺しまくり、旅行バトは、ついに種が途絶えてしまった。

南北米大陸に馬は存在しなかったが、ヨーロッパから船で馬を運び、乗り回しては銃を乱射し、インディアンを殺しまくった。馬や銃を知らないインディアンは、絶滅寸前まで追いやられた。

隣人愛や世界平和を唱え、世界の隅々まで普及活動したヨーロッパの○○教集団は、確かにそれなりの貢献もしたであろうが、その裏は原住民の素朴な神々を真つ向否定し、略奪を繰り返して、上納金を本部により多く納め、出世して本国へ帰ることが、多くの宣教師の現実であったという。

マヤ文明はコロンプス以前に大方衰退したが、今、マヤの遺跡を訪ねてみると、押し寄せたヨーロッパ人により、破壊され、財宝など持ち出された後を見るにつけ、これが先進文明国のやることか：と無性に腹が立つ。第○代の大王の彫像は、大英博物館に：、第△代目はフランスのナントカ美術館に：などと、歯が抜けたように彫像は失わ

れ、遺跡のわきの掲示板に平然と書かれている。

文明が進化するためには、このようなコキタナイことが洋の東西で平然と行われていたということは、やはり、人間の本性の中に、「性悪説」の実態が潜んでいるのであろうか？ 私のような凡人には、「性善説」など、偽善の論理としか思えない。

【高度な天文学を発達させて完成したマヤ文明の「暦法」によると、2012年12月22日、この日を人類滅亡の日と暗示している。マヤ最後の悲劇の王・モンテスマは、白人により騙し討ちで殺害されたが、その呪いとして、白人優越主義の世界に、終止符が打たれる日なのだという。】

* * * * *

さて本論。人類は何を焦ってこんなにも「高速」を求め続けるのであろうか？ 人類に残された「種」としての寿命が残り少ない…と、本能的に察知して焦っているのであろうか？ こんなにも汲汲セカセカの「ゆとり」ない生活からは、何の思索も創造も生まれまい。寸刻を争う焦りの中からは、深遠な哲理も、宇宙の神秘を解く原理の発見も、まず縁遠い話のような気がする。

古代ギリシャの哲人達・インドの仏陀・中国の孔孟思想など、悠久の時の流れの中で、時間をかけて醸し出されたものであろう。そしてマヤ文明の暦法は、1年の長さなど、現代の測定値と小数点以下4桁まで合致するほどの正確さであった。これらは、人々が星を眺め、太陽や月の動きを何百年も観察し、何代もかけて編み出した「暦法」なのである。今日の寸刻を争う論文発表などとは、縁の遠い緩やかな時間の流れの中で生まれたもの

であろう。現代は何もかにも先陣争い。特許争い。

人後に落ちれば何の価値もない。焦りがある。先んずれば人を制す。これでは、少々の検討不足など構ってられない。一刻を争って、世界に先駆け、論文発表しなければ、生き残れない。とんでもない嘆かわしい時代に突入したものだ。

名指しで恐縮だが、先日の中国の高速鉄道追突事件。先進国に追いつけ追い越せの正に焦りの典型。日本やドイツなどから技術導入したが、合成技術の十分な検討がなされていない。消化不良である。安全配慮は二の次。この偉大なる中華人民が、早くその先を行かなければならない。中国の先端技術の卓越さを、急いで世界に示さなければならぬ…という焦りがあったと思われる。

日本の新幹線は47年の歴史がある。その間に一人も人身事故で死者など出ていない。それが本件では十分な慣らし運転の繰り返し省かれ、いきなり高速営業。しかも世界にそのシステムを、いかにも自国開発したかのように特許申請したという。借り物で特許申請とは、沙汰の限りである。

中国産品で、「青森りんご」・「こしひかり」・「松坂牛」などという名が、商標登録しているというが、この度の事件は、こういう低次元の戦略と同格である。経済大国になったのなら、「国家の品格」も、本当の大人になってほしい。

またついだが、8月末、米国のバイデン副大統領が、中国の次期国家主席と言われる習近平副主席と会談した際、習氏は、いきなり高飛車に、①人権問題、②領土問題、③人民元の切り上げの話は持ち出さなさいと釘を刺したという。

【ゲスの勘ぐりと言われるかもしれないが、中華思想に溺れる彼等は、急速な軍拡（2010年

世界の軍事費125兆円の43%がアメリカ、中国7, 3%, ロシア3, 6%, 日本3, 3%）が昂じ、朝鮮半島や日本列島は太平洋進出の目の上のタンコブ。これをなんとか支配下に置ければ、米国と対等またはそれをしのげる勢力となり、世界に君臨できる…と野望を抱かぬとも限らない。

レアアースの輸出制限、北極海の海底資源の権利主張、空母の整備、月の資源採掘権利主張のための嫦娥（ロケット）発射。膨大なアメリカ国債の買占め等、いかなる魂胆があるのか。わが国も、たかが尖閣諸島などと甘く見ていると、どんな大事に至らぬとも限らない。小事繰り返しのうちに既成の事実が築かれる。尖閣・竹島・北方四島など、八方美人外交では、その維持が危ぶまれる。】

* * * * *

さて脇道にそれたが、危険なオモチャの代表格が「原発」。天下り官僚や、欲の皮の突っ張った経営陣や、首を突っ込み甘い汁を吸おうとする族議員など、これらを排除できれば原発は日本産業の基幹をなす電力確保のため、重要な存在である。

【日本の電源別の発電比率は、火力61, 7%, 原発28, 6%, 水力8, 5%, 自然エネルギー1, 1%。（自然エネルギーの内訳は、風力34, 8%, 地熱22, 6%, 廃棄物16, 5%, 太陽光13, 9%, バイオマス12, 2%である）】

原発は、温暖化ガスを出さない、コストも安い。（生産コスト・Kw時当り太陽光発電40円、風力24円、火力10, 2円、原発7, 2円）正に基幹エネルギー源だ。原発はテロリストの最適攻撃目標だが、これほど効果的なのはない。それ

ゆえ機密性が嚴重だが、それがかえって今回、事件発生後の後始末に苦勞する所以となった。さりとて、それをすぐに「脱原発」に結びつけ、歴史に名を残そうとした前総理は、大局観に欠ける。

国内に十分な電力が供給されない事には、いかなる産業もフル生産できない。この度の節電政策には、国民生活はかなり制約を受けた。「節電熱中症」やら、製造業など「海外移転」による産業の空洞化と来ては、日本沈没↓没落もいところ。大方の原発は発電を停止(年末に54基中41基、年度末には稼働ゼロとなる。)し、電力供給が間に合わない。計画停電など、国民の生活基盤が崩される。それに加え住民の避難や、農水畜産物の出荷停止。国民の不安からくる「風評被害」が重なって、正に半身不随の状態である。それほどに、原発事故による被害は甚大であった。

【今回原発事故の後、収束のため、危険な作業に当たった東電の下請け会社従業員などの、内部被曝の結果が、殆ど報道されない。この半年間で、安全限界と言われる年間100ミリシーベルトを超える被曝を受けた従業員は91人いるという。その人たちのことが、報道されていない。また、大量の放射線に汚染され、避難した人々の内部被曝の様子もさっぱりわからない。

中国では原発実験をした地域で、多数の白血病患者や、甲状腺がん患者が出ているが、住民の訴えに政府は「関係ない」の一言。むしろ、国を守るための実験地域にここが選ばれたことを、誇りに思え…とつかえすありさま。

アメリカのビキニ環礁での原水爆実験後の島民の被害もすさまじい。日本の遠洋漁船員も被爆・死亡した。旧ソ連チエルノヴィリは良く分らない。

今回の原発被害について、内部被曝など、人命に関する部分を、政府が秘匿するようなことがあれば、まさに国民を愚弄することになる。】

しかし災害復興財源として、企業が活性化し、多くの法人事業税を納めてもらわないことには、復興はできない。その基幹となる電力が節約を強いられるのでは、まったく筋が通らない。過疎地に原発誘致は、安全神話のからくりにより、よくよく翻弄された。そして結果は、水素爆発やベント(ガス抜き)で、かなり遠距離にも、風向きで放射性物質の濃厚汚染地帯が生じた。

関係筋から確認を取ったわけではないが、人伝に聞いた話では、水素爆発の後、北西に向かって風が吹いていたのに避難民はその風下に向かって一斉に避難したという。気象観測の機械など、地震や津波で機能したかどうか知らないが、政府はもう少し責任感があつたなら、気象庁に風向などを調べさせ、避難民を安全方向に誘導するくらいの「誠意」があつて然るべきであつた。

【世界最悪と言われたチエルノヴィリ原発事故の土壌汚染による強制移住基準とされた1平方メートルあたり放射性セシウム137は、148万ベクレルとされたが、今回の福島原発事故ではこれを超える濃度が測定されたのは6市町村34地点であった。そのうち福島県大熊町では、なんと10倍強の1545万ベクレルで、セシウム134と合わせてると、同2946万ベクレルであつたという。

(この値は、589ミリシーベルトに相当し、安全限界とされる100ミリシーベルトの6倍)。セシウム137の放射能半減期30年で割ってみると、計算上120年経つてもなお、帰宅できない濃度である。(2011・8・30読売新聞・他)】

政府は何もかも後手。「国民の生活が第一」などと掲げた選挙公約はどうしたの? 数十年後の「がん」の発生率が気にかかる。そして与党を攻め立てる野党連合も、超党派で窮状打開の手を打つべきなのに、どんな手立てを講じたというの? 永田町は、正に衆議院議員の巢窟だ。

【私がこれだけ悪舌を叩く根拠は、大震災後、半年を経て、ある新聞がアンケート調査を行い、色々な組織等の「活動評価」を複数回答で調べたところ、次のような結果が出たからだ。誰の目にも最高に見えた通り、自衛隊がトップで82%、次いでボランティア73%、そして消防52%。ワーストは「政府」6%、最下位「国会」3%であった。国の対策の遅れや、与野党対立が続いた現状に国民は、厳しい批判を浴びせている。】

* * * * *

東電も政府も被害の状況を、当初はもつと軽微に考えていた。しかし国際原子力機関(IAEA)の指摘を受け、その危険度を5から最高レベルの7に変更せざるを得なかった。結果は史上最悪のチエルノヴィリ原発事故以上となった。

日本人は原発の恐ろしさを、唯一被爆国として、しみじみ知り尽くしている。ところが今回放射線量が増え、放射性物質の量は、なんと広島原爆の20〜30個分に値するという。即ち福島県に、原爆を20個以上も落とされたことになる(東大アイソトープ総合センター長・児玉龍彦教授談)。

戦争中でもないのに、平和な庶民生活が突如、国内の企業により、原爆投下と同じになり、支離滅裂に壊された。想定外の津波とはいえ、非常用

電源がダウンするなど、何のための「非常用」なのか？ 高い位置に設置する費用をケチんだとか思われぬ。過去の巨大津波襲来など、正に自然を見くびり、歴史の正視を拒んだ報いなのである。こんな危険なオモチャの運転は、利益至上主義の悪魔の手にゆだねては絶対にいけない。新政权は、理にかなった原発活用を図ってほしい。

【強烈な地震や原発事故のせい、私の脳味噌は、一部損壊どころか半壊ぐらいのダメージを受けた。脳味噌の除洗はどうやればいいのかな？ へソ柱までギリと曲がり、倒壊寸前である。

本来私は、もう少し柔和で、かなり寛容な性格の筈だった。旧友に私の文集を送ったら、『気でも狂ったのか？ いい歳をして、なにを吠えまくっているんだ。歳なりに丸くなれ！』と、酷評を受けた。しかし近年、世の中が、こうも乱れ果てる、持つて生まれた正義感というか、黙っていられなくなる。国家の安全保障を根底から覆す今回の原発事故など、利益優先主義や、政府の後手後手の放射線対策を見ると、私は急遽豹変し、狂犬のように噛みつきたくなる。私の人格は破壊され、毒舌三昧に陥ったのは、官邸の出遅れのせいだ。

この度のわが国の政府も企業も、高架橋から追突転落した列車を、さっさと証拠隠滅のため土中に埋めた、どこかの国のレベルと、チットモ変わらない。共通項「人命軽視」は、絶対に許せない。こんな悪魔に噛みつかないで何に噛みつく？！】

* * * * *

人類はどこまで物質文明を發展させるのであるか？ 機械文明は無限大に伸び続けるのである

うか？ 地球の面積には限界がある。今、地球上では、毎年8500万人ずつ人口が増え続けている。さりとて、月や火星への移住は、ままたらぬ。まして、系外惑星への遠征など、夢のまた夢。

環境保全や自然保護もできず、無限大に増える消費を制御できず、更に人口増加もコントロールできずに今日に至った。諸悪の根源は人口過剰。

小さな島でネズミが異常繁殖。食べものは喰い尽し、共食いまで行われ、海に飛び込み集団自殺する…こんな悪夢が頭をよぎる。

戦争・悪性伝染病・大事故の連発などで多数の人命が失われるのは、人智でコントロールできないのならば…と、悪魔が天空から人口削減の手助けをしてきているのであろうか？ この動物の繁栄も命脈尽きた。ハイッコレマデヨ！悪魔は人類に引導を渡す時期と読んでいるに違いない。

動物の中で、突出した進化を遂げながらも、なんらセルフコントロールできなくなった人類という化け物。悪魔の手を借りなければ、己を制御できないのであれば、こんな情けないことはない。

ピヨンスと話したい

伊東弓子

今年の三月、一年生になるピヨンスの祝いに韓国へ行くことにした。ピヨンスに合うのは嬉しい筈なのに気が重い。大きくなったあの子と話が出来ないこと、話が出来ないからどう付き合っていくか不安だった。でもあの可愛さを思うだけで不安は消されていくようだった。

韓国へ行き始めてから十年になる。今迄、言葉

のことで特別不自由もしないで過ごしてきた。家では娘を介して旦那や両親、親戚の人達とも通じ合えていたからだ。外へ出た時はどうだろうか。買物の時は品物を見て買求める。分かりにくい物はメモを持って出かけていた。散歩の時は写真を撮ったり珍しい物を探す楽しいひととき。そんな時お婆さん達がよく声をかけてくれたが、言葉が通じないと分かると「うん」と通り過ぎて行つた。悪い感じはしなかったが、折角の出合いが跡切れてしまうことが残念だった。メモも持たず状況の変化に対処出来ないで困ったこともあった。局で葉書と切手を買うのに苦労した。「葉書を五枚ください」という気持ちを表すのに、長四角を書いてその上に字を書く真似をし、五を五本指で示し両手を重ねて頂戴のジェスチャーも通じなかった。外に出て葉っぱを取って来て前と同じ様にやってみた。何が通じたか引出しを開け「これ」という素振りでも葉書を見せてくれた。そうすると切手は簡単だった。私の要求通り用事が済んで気持ちがよかった。家で娘に話すと柳(ユウ)娘の旦那さんは「オモニ、よくやったね」と誉めてくれた。この後大いに自信をもったがパン屋に行つた時は悔しいおもいをした。客は三人それぞれが品物選びをしていた。千五百ウォンの食、パンなので二千ウォン出して釣銭を貰うのを待っていた。そこへ母親と子どもが菓子パンを何個か持ってレジの前に立った。私が済まない中にと、心穏やかではなかったが待つことにした。その親子が帰っても私には何の声かけもないし釣銭もくれない。私は必死に説明を始めた。「二千ウォンあげて千五百ウォンの食、パンを買ったが五百ウォンの釣銭を貰ってないのでください」という気持ちを食、パン

と値段の数字、渡したお金の数字、私と貴女とのやりとりを身振り手振りで表してみた。レジの女の子はチンプンカンプンの様子。私は相手を分からせようと紙とペンを取り出して値段と渡した金額、釣銭の数字を書き、より具体的に繰り返し説明した。でもだめだった。私も困ってしまった。奥の方から中年の女の人が出てきた。その人にも説明したが戸惑っている様子で反応がない。そこへ店内にいた男の人が私が説明しようとしていることを話してくれている様子だった。中年の店員は納得したようで、レジの女の子に説明している。分かってくれたようで五百ウォンくれた。男の人の存在が有難かった。まずは一件落着と店を後にしたが二度とその店に行っていない。話しが通じない事で誤解も起こる。あの子達とはあのままになつてしまつたがどうしているだろう。入学式の二〜三日後のことだった。ピョンスを迎えに行つた時、高学年の子が数人歩いてきた。申し合わせていたのか突然固まり出して小柄な一人の子を足蹴りを始めた。体当たりして倒れんばかりだった。どうとう我慢出来ず口出した私。「一人の子を大勢で虐めちゃだめ」という意味で身振りで訴えてみたが立ちはだかる様に私を見て「イルボン、イルボン」と薄笑いしている。こちらは怒ってるんだという気持ちを露にして声を荒だて日本語で怒鳴っていた。ああ「駄目な私だ」と気を落している私を尻目にその子を残して行ってしまった。後に「イルボン、イルボン」の音が落ちてくる様な思いがした。あの子達はどうかしているか気になる。今までの経験を活かして韓国で一ヶ月楽しもうという気持ちと言葉の不安を抱えて二月末ピョンスの所へ出かけた。心配した通りだった。成長し

た孫達と話す術がなかった。母親との通訳で話は弾んでも離れると黙りこくってしまう。そういう時間の流れが多くなると私も苦しくなってくる。ピョンスだつて戸惑ってるんじゃないだろうか。話しかけても振り向かない。二つ下のトンワも三つ下のトンリムも冷ややかだった。傍にこない。無表情の話しをする。拒否される。投げたり抵抗したりする。孫達とコミュニケーションがとれずに辛かった。それは仕方ないことだろう。孫達は通じない気持ちを正直に表しているにすぎないことだった。今迄どんな風に係つてきただろう。電話で月に一度は話した。挨拶、天気、食事のこと。名前を呼び合つたりして響きや会話のやりとりと思つてやつてきたが日本語中心だった。童謡を唱えたり昔話しても聞かせた。カルタとりも一緒にしたかったがそのひとつひとつは役にたたなかったのだからかと悲しい思いだけがが増えて、引きずられるかのように三月末に帰途に着いた。帰つてから私は「ピョンスと話したい」という目標を何とかしようという思いだった。そんな時折よく講座があるというので飛びついてみたがとても難しいようだった。でも何回か足を運ぶ中に言葉を表す文字の組合せが何となく見えるようになってきた。それから半年、お産の手伝いに行くことになった。一年生になって半年過ぎたピョンスもすっかり学校生活に馴じて、遅しくみえた。学校から帰ってくる時、私の近くに居て作った物を見せてくれたり宿題をしていた。私もこの時間を利用して一年生の漢字や韓国語の婆ちゃん勉強が始まった。ある時カードを持ってきて「婆ちゃんにあげる」という。ハングル文字で表に単語が書いて

てあつて裏に絵のあるカードである。文字を私に見せてピョンスが韓国語で言う。私が真似をしていく。発音が悪いと何度もさせられた。次に絵を見て私が日本語でいう。その後ピョンスが言う。五十種類あるカードを毎日行つた。とても楽しかった。買物や学校へ遊びに行く道々で店の名、木の名、草や花の名を覚えてくれた。ジェスチャーも交えて語りかけてくれる時も度々あつた。韓国語の出来ない私の為にこの子なりの方法で私に教えてくれる。思いやりが土台になつてピョンスも

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

- 10月23日(日)小原聖子モデルコンサート&マスタークラス・フルッソ
- 10月29日(日)フラヴィオ・クッキ ギター・リサイタル
- 11月3日(日)ジョルジュ・ミルト&宮下祥子コンサート
- 11月5日(日)福田進一ギター・リサイタル
- 11月23日(水)アンドレイ・パルフィノヴィッチ・ギター・リサイタル
- 11月27日(日)木管トリオ・コンサート
- 12月4日(日)角圭司ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

相当努力している事を思い込んだ。妹のトンワや
トシリムも表情が和らいだ。私に遊びを要求する
ようになった。トンワは兄を真似てか発音を直し
てくれたり、ジェスチャーを入れて表現してくれ
る。堅い表情が消え明るくなった。トシリムはよ
く泣く。お姉ちゃんになった辛さを味わっている
のだろう。抱いてやりたくて手を出しても「オン
マ」と言って母親の方に行く。少したつと私の回
りに戻って紙を折ってくれる。ままごと遊びも多
くなって皿や茶碗をくれる。私が韓国語が出来な
い事などお構いなく話しかけてくる。返事を求め
ることもなく話しかけてくる。返事を求めること
もなくただ喋っている。私も日本語で相槌をうつ
ている。ノリトへも誘われた。今私は大声で笑っ
ている。そうだ。遊ぶことだ。と気がついた。前
は沢山遊んだのに今どうしたのか近づいてこない
孫達と思っていたのは、私自身が近づこうとしな
かったのだ。後一週間で帰るこの時期に気がつい
た。遅くはない沢山遊ぼう。今の時間を大事にし
たい。お茶の時娘とも話した。自分を否定するこ
との少ない娘が「私がもう少しお婆ちゃんと子供
達の橋渡しをしてあげればよかったんだよね」と
言ってくれた。(そうなのよ) 実は、私は娘のその
気持ち欲しかったのだ。何かを感じたから言葉
にしてくれたんだらう。嬉しかった。あと一週間
というこの時期に霧が晴れた嬉しさに娘の前で泣
いていた。これで娘への蟠りも消えて孫との接近
もより深くなり気持ちよく帰れると胸を張ってい
た。それにアドバイスもくれた。「お母ちゃん無理
しないで、韓国語の単語を覚えたり、漢字と韓国
語の関係を知るといいよ。子供の会話をよく聞く
ことや、韓国語の子供番組を見るのもいいよ」と

いうことだった。勉強はその人なりの方法で、楽
しくやることだと娘や孫に教わった満足の日々だ
った。

秋夕(チュック)の日に娘の義理の姪にあたる女
の子が日本語の一級資格を取れたと大喜びで私の
傍に来てくれた。

「日本語で話せるチャンスが来たと思ってお婆
ちゃんに合うのを楽しみにしてました」

と話しかけてくれた。地震、津波、原発のその
後の状況、韓国の秋夕(チュック)と日本のお盆の
様子、一緒に勉強していた小学生の覚えのはやい
のには驚いたこと等話がつきなかった。「ムカツク」
なんて言葉も使っていた。日本人と日本語で話せ
た事が満足だという。日本に行く日を楽しみにし
ている様子だった。私も久しぶりに私の言葉で話
しが出来て満足だった。やっぱり通じること、や
りとりが出来るのは楽しい。

日本人同士でも相手に届かない気持ちや誤解は
沢山あるように思う。一緒に活動している仲間を
理解してあげる手段であり、言葉である手話を知
ろうともしない私だった事に今回気がついた。素
晴らしい舞を見て感動しても作業中、展示の準備
時に貴女を分かってあげようとしていなかったわ
ね。これからペンでの会話も心がけようと思う。

自分が辛い事は大騒ぎ仕勝ちだ。孫達は一回り
大きくなったし、私も苦しさから欠けられて一寸
回りへの心使いにも気がついた。よい機会だった。
娘達は旦那とコミュニケーションをとる為に、こ
の国で生活する為にどれ程努力をしたことだろう。
辛い日、涙した日、馬鹿にされた日、その度に言
葉の数が増え、この国で生きていく気持ちが強く
育っていったことだろう。私の辛さなど比べもの

にならない程の困難をのり越えて来たことだろう
し、これからも頑張っていくことだろう、と思い
ながら甘納豆を摘む娘の横顔を眺めていた。

お話し出来るように頑張るから又手伝ってね、
ピョンス。

旅人(2)

小林幸枝

八月二週間の夏休みをとり、沖繩を旅してきた。
先月号からその旅行記を紹介し、今回はその第二
回目である。

八月十日、宮古島から石垣島に。石垣島には今
回で三度目となる。ホテルに着き荷物を預けると
すぐに小浜島に行き、自転車をレンタルし観光に
出発する。自転車をこぎ出し直ぐに失敗したと気
付く。小浜島は上り降りの激しい道なのだ。電動
アシストの自転車にするべきだった。この日は汗
だくの日となってしまった。

○大岳(うふだき)展望台

島の中央に位置してある大岳は、八重山の展望
台ともいわれ八重山の島々を三六〇度見渡せる
場所だ。しかし、展望台までの階段が長く急で
息切れと大汗で大変な思いをした。

○ちゅらさん展望台

海中には魚垣(ながき)が見える。西表島方面に
はドラマ「ちゅらさん」で有名になった「和也
の木」も見える。

○マニタ展望台

ドラマ「ちゅらさん」の出迎えや別れの港の場
面はここで撮影されたのだそう。

○オヤケ赤蜂の森

オヤケ赤蜂は、昔琉球王朝に苦しめられた農民達の先頭に立って反乱を起こした赤蜂と言う人物が追われてさまよいこんだと言われている森で、森の中の岩には赤蜂の怒りの足跡が残されている。

○魚垣(ながき)

琉球時代に作られたもので、石を積み上げて浅瀬を囲み、潮の干満を利用して魚を捕る仕掛けである。

○こはぐら荘

NHKの朝の連続ドラマ「ちゆらさん」の撮影でも使われた美しい古い古民家である。

○シュガーロード

高台の集落からさとうきび畑の中を走る一本道。大きな空と美しい景色の広がる道である。行く手には海も見えている。緩やかなうねりのある下り坂で、自転車で走るに最高の道である。

八月十一日、鳩間島。ゆっくりのんびり歩いて一周二時間ほどの小さな島である。島内は水着姿で歩いたり、御嶽に勝手に入ったりすることは厳禁である。この日は、石垣島で友人に会うため、早めに引き上げた。石垣島の友人とは七年ぶりの再会である。一緒に食事をとり旧交を温めた。

八月十二日、西表島。西表島は、沖縄本島に次ぐ二番目に大きな島で、原生林に覆われ、その大部分が未だ人跡未踏の秘境です。

西表島には、世界的にも珍しい動植物が生息しています。一般道路からその自然を目の当たりにするだけでも十分に楽しめる島ですが、今回はそ

の日本最大の亜熱帯ジャングルへの観光です。

大原港に見学ツアーの7名が集合。7名の内北海道から来た家族が4名、福岡から来た女性2名、そして私です。北海道からの家族のお母さんは手ができ私も思わぬコミュニケーションで大感激でした。ツアーでは沢歩きと沢下りを体験しました。

丸い体で前に歩くミナミコメツキガニ(兵隊蟹)の何千という大行進を見て大感激。また、干潟ではトントンミーというミナミトビハゼの可愛い歩みにみんなで大笑い。本当にトントンミーといったふうな歩き方である。その他シオマネキ、サキシスオウの木、ヤエヤマヒルギ、メヒルギ、オヒルギなど沢山のものを見た。マングローブの木を見ていると植物の生命力を感じた。

見るもの遊ぶものが沢山で時間の過ぎるのが惜しいほどであった。帰りに皆は西表温泉に行くというので、私だけが港に戻った。一緒に温泉に行きたかったが石垣島で友人たちと食事の約束があったので仕方がない。

八月十三日、西表島・由布島。ここではピナイサーラの滝、マヤグスクの滝、カンビレーの滝、宇多良炭鉱跡を観光しようとツアーに申し込んだところ夏休みで満杯。仕方なくレンタカーでと思ったら、レンタカーも大混雑。やっと軽自動車が見つかりそれで観光となった。

○由布島

由布島は、かつて竹富島や黒島から移り住んできた人達が、対岸の西表島で稲作をして暮らしていた。その頃、農耕に活躍していたのが水牛である。水牛は昭和7年頃、台湾からの開拓移民と共に

に石垣島に渡ってきた。当時、水牛は高額で二頭分の家が建つ、と言われた程だったそうです。水牛が一番多くいた時期は昭和三十年頃で、各農家に一頭の水牛が飼われていたという。しかし、昭和四十四年のエルシー台風で大きな被害を受け、島のほとんどの人が西表島的美原集落へ移った。しかし、西表正治さんと奥さんの二人が島に残り「島をパラダイスガーデン」にのロマンを描きながら一頭の水牛で土や堆肥を運び、ヤシや花を植え続け、手造りの楽園を造り上げたのでした。

由布島は、西表島・美原集落の対岸にある周囲2キロ足らずの離れ小島です。島までは400メートル程度で、遠浅になっていることから海を水牛が引く牛車で渡ります。牛使いの人の話しや三線と歌などを聴きながらのんびりと渡ります。時間がつつてもユックリと流れます。

星砂の浜で昼食。そして、星の砂浜に出て星砂探し。綺麗な星砂を拾ってきた。しばらくぼんやりと景色を眺めていたら、カンムリ鷺に似た鳥を発見。たぶんカンムリ鷺だろうと思う。偶然の出会いに感激し、最後に忘勿石を見て大原港に戻った。イリオモテヤマネコにも出会ってみたかったけれど残念ながら今回はお預け。

八月十四日、波照間島。波照間島へは高速フェリーで渡る。乗船一時間ほどである。寝不足続きなので少し眠ろうと横になったのはいいけれど、出航して暫くすると突然に激しい揺れで、とても眠ってられない。急浮上したり急降下したりで何時事故が起こるかヒヤヒヤしながらの航行だった。

波照間島に着くと直ぐにレンタル自転車店に行

き、借りる。今度は電動アシスト付の自転車にした。快調な滑り出しでニシ浜ビーチへ向かう。ニシ浜ビーチは、淡いブルーの海で、大変美しい所だった。

○日本最南端の碑

碑の周辺には何も無いが、高那の岸壁と大海原、吹き渡る風が日本の一番南に来た気分させてくれる。

○高那の景勝地

大海原の眺めは雄大で、眼下の海の色は吸いこまれるような美しさであった。但し、高台までの道には手すりや階段もなく、怖い思いをさせられた。

○星空観測タワー

波照間島は、星空の美しさでは国内有数の場所である。夜空に輝く圧倒的な星の数は圧巻である。観測センターはお盆休みで休刊になっていたため、館内の見学は出来なかった。

○シムスケー(古井戸)

井戸の一角がシム村と呼ばれていた頃からこの井戸は島の人々の貴重な水源であった。水量も多く、水質も良い井戸である。この井戸は、どんな干ばつの時にでも枯れることはなく、島の人々の暮らしを支えてきたのだが、今は水汲みに来る人もなく、ひっそりしている。

○コート盛

藩制の頃の火番所(周辺海域を見張り、合図・通信のための灯火を焚いた)の跡で、見た時こんな低い場所で大丈夫なのかと思つたが、石段をあがってみるとぐると見渡せる場所であった。

○オヤケアカハチの碑

琉球王府に苦しめられていた農民のために反乱を起こした八重山の英雄であるオヤケアカハチの生誕の地。碑は集落の中にあり、伝説も色々残っている。

○下田原貝塚

見に行ったのだが、道が草や木立に隠れ良く解らないばかりか、「ヒメハブ注意」の看板が立っていたので怖くなって進めず、残念であった。

帰りのフェリーもまた大揺れになるのかと心配でしたが、今度は比較的静か。大原港から石垣島迄はかなり揺れたが、無事石垣島に到着。

八月十五日。今日は休養日。洗濯をし昼寝。夜は石垣島の友人たちが集まり飲み会。沖縄の人は皆良く飲む。二時過ぎまで大騒ぎ。

この続きは又来月号に。

さて、十一月十一日〜十三日は、ことば座の第21回の定期公演です。今回は、ギター文化館講師のギターリスト大島直さんとのコラボレーションとなります。筑波山の唄歌をモチーフにして、今迄とは少し違った形式の台本です。万葉の唄歌の歌をクラシックギターの調べにのって、舞います。

「湖の弦音」と題して、霞ヶ浦・三叉沖に嵐で遭難した恋人を思つて、歩崎観音の立つ高台に舞います。

どうぞご期待ください。六月に柏木由紀子さんとの共演で学ばせて頂き、更に大きく美しい舞になるよう頑張っています。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第三章 因果応報の範囲(5)

さて、河津祐親を狙う大見、八幡の二人は狩り場となった伊豆山中の奥で二つの山が連なる場所に待ち伏せすることとし、大きな椎の木で身体を隠せる場所を選んで上から矢を射掛けるように身構えており、念の為に二人は別々に射るよう手筈を整えていた。狩り場を移動する武士たちが次々と通るが、狙うは伊豆伊東一族の木瓜(もっこう)紋を付けた河津祐親一人である。やがて、その場所を土肥次郎が抜けた後に、少し間置いて木瓜の紋どころを付けた武士が来た。「これぞ、祐親！」と二人の射手が狙い定めたのだが、大見は僅かにタイムングを外してしまい、八幡が目標を背後から射るような形で、腰の辺りを射通した。馬上の敵・河津祐親は堪らず地上に転落した、と見えたその時に別な武士が現れたので大見が二の矢を放ったが、これは馬上の鞍に当たった。見れば、それが狙った相手の河津祐親であったから大見と八幡は狙撃に失敗したことを知った。祐親の目前で射られたのは息子の河津三郎祐泰である。祐親は駆け寄りながら「賊が現れた！先陣は戻られよ。後陣は急ぎ進まれよ」と叫んだ。これを聞いた襲撃者二人は狙うべき祐親を目前にして逃走せざるを得なくなった。折から秋の長雨に入る季節で初時雨が降るとも降らぬともなく草木を濡らしていた。重傷の祐泰は馬上から落ちて気を失っており、祐親が日頃の悪党に似合わず涙ながらに

かきくどく言葉も耳に入らなかつたが駆け戻つてきた土肥次郎實平が大声で「…敵は覚え給ふか」と聞くと辛うじて気がつき「…工藤一郎こそ意趣有る者にて候へ。今、大見、八幡こそ見えて候ひつれ。怪しくおぼえ候ふ。祐経、在京して公方の御意の盛りにて候ふなる。然れば殿の御行末いかかと、冥途の障(よみじのさわり)ともなるべく候：(曾我物語」と言い残して息絶えた。

事件があつた狩りのことに続き、この祐泰の最後の言葉は素人でも不自然と分かる矛盾がある。「狙撃犯の大見、八幡を見かけた」というが霧雨の山中に隠れ、距離を置いて矢を放つた犯人の顔を明確に特定することが出来るものであろうか？何よりも、当時の工藤祐経は河津祐親の策謀で職を失い領地を失つていたからこそ、大見、八幡が恨みを晴らそうとしたので、在京しても居らず公方の御意にも叶わず、河津祐親の行く末を妨害する力はないのである。そして、大見、八幡の犯行を工藤祐経の所為にする物的具体的な証拠が無いから現代の裁判ならば百%無罪になる。

残酷な言い方をすれば河津祐親は「因果応報」の結果として後継者の祐泰を失つたことになるのであるが祐泰には五歳の一万と三歳の箱王という子があり、その二人がやがて「曾我兄弟」として成長した後に親の仇として富士の裾野で工藤祐経を討つ—というのが曾我物語の大筋である。因果の種を撒いた河津祐親は工藤祐経から領地を奪い取り、伊豆伊東の惣領に収まっていたから既に伊東次郎裕親と名乗っていたけれども、息子の三十五日法要が済んだ時に仏門に入り「伊東入道祐親」と号した。頭は丸めても本性は変わらない。これが安元元年(一一七六)のこととされている。

大方の史書には触れていないのであるが、河津祐泰の未亡人、つまり曾我兄弟の母親は同族の工藤介茂光(へいこうのすけもちみつ)の娘か孫娘になるらしい。茂光は騒動の原因を作った工藤家継こと楠美入道寂心の子供ではないかと思われるが、何らかの事情で分家して宇佐美を継いだようで、治承四年に源頼朝が石橋山で兵を挙げた際には一族を率いて駆けつけた。平家方の大庭景親や伊東入道らに攻められて頼朝など僅かの人数が山を越えて逃げるのに、茂光は太つていて山道が登れないから、そこで切腹して果てた。メタボリック症候群の犠牲者第一号とも言える人物である。

幼い二人の子を残して夫に先立たれた河津祐泰の未亡人は尼になる決心をした。しかし舅の祐親はそれを許さずに、遠縁に当たる相模国の曾我太郎祐信に子連れで嫁がせた。それから十八年経って兄弟は父の仇として工藤祐経を討つことになるのであるが、よく考えると、これも不自然である。その頃は源頼朝が征夷大将軍となつて鎌倉幕府を開き日本中が頼朝に支配されているような時代である。兄弟を育ててくれた曾我祐信も最初は敵対していたが後に降伏して許され鎌倉幕府の御家人になつており、工藤祐経の妻であつた萬劫御前は土肥遠平に再嫁して、同族の宇佐美を始め、三浦、和田など頼朝の身近に仕えている武士たちは親類筋である。そういう環境の中で幕府の重鎮でもある工藤祐経を讒が生えたような昔の恨みで仇として狙い頼朝の本営近くまで潜入して仇討ちをする…親戚中に迷惑がかかる重大事であるから通常ならば考えられないことで、裏に何らかの陰謀が有つたとする説は真実に近いのであろう。

欲望と怨年に満ちた伊豆の小豪族同士の争いは

どうでも良いのだが、狩り場の話のように、この一族の出演する場面には嘘か本当か、事件がらみで流人暮らし時代の源頼朝が顔を出すのである。そこで、先ずは地元の暮らしにも慣れた伊豆流人生活後半の頼朝について話を進めることにする。

前編で述べたように、死罪を免れた囚人として伊豆に流された頼朝少年を全面的に支えていたのは武蔵国比企郡の豪族・比企掃部允(ひきかもんのじよ)の妻(比企尼)である。頼朝の生母は熱田神宮大宮司の娘であつたから自分で子育てなどしなかつた。幼少期の頼朝は乳母の比企尼に育てられたのである。我が子同然の頼朝が陸の孤島に放り出されたのを知つた比企尼は、夫の協力もあり都から武蔵国まで下つてきて、そこから伊豆に通い全面的に頼朝を庇護した。

その比企尼に三人の娘があり、長女の婿は頼朝の秘書官として鎌倉幕府にも重きをなした安達藤九郎盛長であり、次女は桓武平氏の末流を称する川越太郎(源義経の正室の父)に嫁ぎ、三女の夫が伊東九郎祐清なのである。曾我物語に話を戻せば伊豆山中で射られた河津祐泰の弟で、やがて狙撃犯の二人、大見小彌太と八幡の三郎を兄の仇として討ち果たしたのがこの祐清である。曾我兄弟の仇討はこの時点で終わっていることになり富士の裾野の事件は益々怪しくなってくる。それはともかく、この伊東祐清と言う人物は、評判の良くない父親(伊東入道祐親)に似ず、立派な武士だったようで、後に頼朝も是を重く用いようとしたのだが、平家の恩があるからと断り、頼朝と戦うことを避けて木曾義仲の軍勢と対戦する平家の陣に赴き、討ち死を遂げたと言われる。

伊東祐親には祐泰、祐清のほか女子が何人か居

たようで、長女の婿は前編で登場したように一族を挙げて頼朝救援に駆け付けた三浦義澄であり、次女が工藤祐経に嫁ぎながら離別させられた萬劫御前である。そして祐清の下に八重子と言う三女が未婚でいたのだが、其処までが先妻の子であり、後妻との間にも娘が居たと思われる。八重子については余り知られて居ないが、兄に似て性格の良い温和な女性であつたらしい。

さて、ここで少し年代を進ませて治承元年（一一七七）の九月のある日に場面を設定する。伊東祐親は平家に命じられた京都勤番の任務を終えて三年ぶりに伊豆へ戻ってきた。当時の武士団には勤勞奉仕のように都で勤務することが義務化されていた。そうなると安元二年（一一七六）十月に、伊東祐親が頼朝を招待して自宅でパーティを開き、さらに伊豆山中で狩りをして、そこで曾我兄弟の父親が工藤祐経の家に矢を射かけられた―という話が怪しくなってくるのだが、従来の説では治承元年と安元元年を取り違えているので、辻妻が合つていたらしい。明治の文豪・幸田露伴がその辺の矛盾を指摘している。

全国的には知られていなくても伊東祐親は豪族であるから、それなりの広い屋敷に住んでいた。「やはり我が家が一番に寛げる…」とか、言いながら庭の木々を眺めていた祐親が目にしたのは女中たちを相手にして遊び戯れる二、三歳の男の子の姿である。三年前に京都へ向かう折には幼子は居なかつたし、若い後添えを娶っていたから祐親の子が生まれる可能性はあるが聞いてはいない。不審に思つて、女中を呼び「何処の子か？」と尋ねると、なぜか困つた顔をして「…御免を…」と逃げて行つた。怪しんだ祐親は、まさか妻が…と憚

然とした様子で本人に問えば言い訳が先になつて「…私が止めるのを聞かず…実は八重子の生んだ子です…」と言う。祐親は「父親は誰なのか!」と言葉を荒げる。「…それが流人の頼朝殿が通つて来て…」と、他人ごとのように答えた。これが実の母親であれば庇つてくれるところ、継母にも娘が居たけれども八重子は美人であつたし、自分の生んだ娘よりも、嫁ぎ遅れた八重子を選ばれたことの妬みもあつて呆れた様な言い方をした。祐親は烈火の如く憤り「…乞食、非人、商人、修験者などを婿に取りたらば、是非も無しと堪忍するが、今どき平家全盛の時代に“世になし”と言われる源氏を婿に取り、咎めをうけた場合には伊東の家は滅亡である…」と言ひ放つた。これは源平盛衰記や曾我物語が書いていることなので、もし表現に差別用語があつても御容赦を…。

当時の武士の立場からすれば、これは言えないことでは無いが、そうなると曾我物語にあるように「頼朝公を慰めるために伊東の館に武士たちが集まり大宴会をした上に狩りを催した」と言う話が嘘であることを証明することになる。曾我物語には「頼朝が伊東の館に居た」として居るから八重子とも顔見知りであり、男女の仲に発展することも予想される範囲である。ただし「…伊東の館に居た」というのは住んで居たという意味では無く、監視人である伊東と北条の許へは報告の意味もあつて時々は顔を出していたのであろう。頼朝自身も「平家追討」の令旨を受け取るまでは源氏の再興など夢のまた夢であつたから、どこかの豪族の婿にでもなつて暮らせれば…という心づもりも無かつた訳ではない。八重子のほうでも、頼朝は単なる流人では無く、かつては伊東の主筋であ

つた源氏の御曹司であると承知している。そうした条件下で、さらに八重子の兄嫁が頼朝を支える比企尼の娘であり、頼朝に従う藤九郎盛長が義兄となれば、彼らを交えて若い二人を結びつける動機は十分に出来ていたのである。

伊東祐親が通常の武士ならば「困つたものだ」と思いながらも、娘のために事の次第を平家に報告し得意の賄賂を添えて許可を貰う努力をするところである。しかし祐親は兄を呪ひ殺し、その領地を奪つた人物であるから「…乞食、非人、商人、修験者に嫁がせても源氏は婿に取らない…」と暴言を吐き、鬼のような本性を現して非情にも幼子を殺害するよう家臣に命じたのである。

頼朝は、生まれた子に「千鶴丸」と名付けていた。鶴は千年、その千倍も生きよ!という親心である。世が世であれば、千鶴丸は清和源氏嫡流を継ぐ立場にある。しかし、鬼より酷い祖父の狂気に投げ捨てられることになつた。母親の八重子は、突然に我が子が連れ出されたのを見て半狂乱で泣き叫んだけれども、鬼と化した祐親は微動もせず母と子を引き離した。少し後のことになるが、祐親は否応なく八重子を江間次郎という武士に嫁がせた。「江間」は頼朝が流された蛭が小島の近くの場所のようで北条氏に縁のある武士と推定されており北条政子の弟で北条氏二代目を継いだ義時が「江間小四郎」を名乗っている。工藤祐経と源頼朝とは、伊東祐親の「ゴウツクバリ」によつて共に「妻を奪い取られた」義兄弟の間柄である。伊豆の伊東温泉街には松川が流れている。伊東から修善寺の方に抜ける街道は松川に沿うように九十九（つら）折りに曲がつた山道、峠道である

が現在の温泉街から西へ四、五キロ行った辺りに
は轟が淵と言つて轟々と音を立てて流れる場所が
あった。近代には水力発電所が置かれたりしたよ
うであるから、かなりの激流であつたことが推測
される。嫌な役を命じられた家臣たちは山奥に連
行されて恐怖に泣き叫ぶ千鶴丸を、丁重に担ぎ上
げてから、さすがに顔を背けて淵の激流に投げ込
んだ。その時に主君の命令とは言え、酷いことを
させられた家臣は、せめてもの懺悔の気持ちから
鎮守の社殿に生えていた楠木の枝を折り、千鶴丸
の手に握らせた。枝にすがつて生き延びよ！と言
うはかない願いであつたらう。

その事件があつて、この淵は「児(ち)こが淵」
と呼ばれるようになったと言われる。千鶴丸の遺
体は、楠木の枝を握つたまま伊東の東にある川奈
の浜に流れ着き、哀れに思つた村人が小さな祠を
立てて弔つたと伝えられていた。―実はこれから
先に延々と続く話があるのだが、千鶴丸が伊東祐
親の業により幼い命を絶たれた今は、余りにも酷
い話なので、この件は一先ず中断させておく。

伊東祐親は、自分の孫を虐殺しただけでは足ら
ずに源頼朝の命まで狙つた。自分が監視役である
から「頼朝に不穏な動きがあつた」とでも報告す
れば、平家に咎められることは無いであろうと考
えたのである。同じく監視役の北条時政がいるけ
れども、幸いにして祐親とは入れ違いに京都大番
役に出て三年間は留守である。兄である工藤祐継
を呪い殺してから、自分が辿つてきた道に失敗は
無かつた祐親は、(伊豆の巻狩りに於ける河津祐泰の不慮の
死を除き)頼朝殺害も簡単に実行できるつもりで家
臣に計画書を作らせていた。

その頃の婚姻形態は平安時代の名残で、男性が

目標に決めた女性の許に通う「妻問ひ婚」であり、
生まれた子は女性の家で育てられた。男性は自分
の都合だけで、いわゆる女房子供に会いに行く、
という形であつたらしいから、刑務所の施設が無
くて適当な家をあてがわれていた頼朝も、そこか
ら自由に「夜這い」に出かけたのであろう。千鶴
丸が轟が淵に沈められたことも頼朝は直ぐには知
らなかつた。夜中に、頼朝の危機と共に一大事を
知らせて来たのは八重子の兄・伊東祐清である。
「父親の祐親が狂気の余り頼朝公の命を狙ってい
る」と言われたのだが、前後の事情が呑み込めな
い頼朝は祐清の言葉が信じられなかつた。父親の
悪事を子が暴くことに不信感を持つたのである。

そこで頼朝は「そう言う事態ならば、逃げ隠れ
しても討たれるであろうから、そなたがここで私
の首を斬り、それを持って伊東へ行くが良い：」
と言つた。祐清は「お疑いはご尤もですが、もし
私が頼朝公に対し、不忠の行いがあつた時は三島
の大明神はじめ伊豆の神々の罰を蒙る覚悟が出来
ております：」と言つた。頼朝は初めて祐清の忠
誠心を知り感激した。しかし事態は緊迫している。
祐清は「明日の朝も、頼朝公の世話をされる藤九
郎盛長殿と弥三郎刑部盛綱殿のお二人が普段と変
わらないようにしていれば、監視している者も頼
朝公が居られると安心するでしょう。頼朝公は馬
の口取り役(名を鬼武と伝えられる)のみ一人を連れて
急ぎ、この場を離れて下さい」と提案した。そし
て「自分は伊東の館に戻り、何とかして追手の派
遣を遅らせるようにする」と言い置いて館へ帰つ
た。無道な人物でも親は親、伊東祐清は旧主・源
氏の頼朝と父親の命令との板挟みに苦しみながら
頼朝に危急を告げて去つたのである。

頼朝は夜中に蛭が小島を抜けだし、朝早く起き
た盛長と盛綱は、大袈裟に欠伸(あくび)をしなが
ら、いつもどおりの食事の支度などをしていたか
ら、偵察任務で双眼鏡を覗いていた伊東の家臣も
「異常有りません」と祐親に報告した。安心した
祐親は頼朝を暗殺する手段のシミュレーションを
始めた。その頃には頼朝主従も伊東からは数十キ
ロ離れた場所まで来ていた。しかし、何処へ逃げ
込むかの当てはなかつた。伊東祐親と共に平家か
ら監視役を命じられている北条を頼るのが最善の
策ではあるが主の北条時政は都に行つていて、

留守を守る嫡男の義時は未だ若いから伊東祐親に
丸められて敵になる恐れがある。枝木で傷つきな
がら、当ても無く山中を逃げ廻る頼朝は、広い世
間に自分の住む場所が無いことを痛感していた。
祐親が言つたように正に「世に無し源氏」である。

切羽詰まつた頼朝は、学問を教わつていた伊豆
山権現を頼ることにして、隠れた山中から海岸部
に降り、夜明けとともに駆け込んで事情を話し、
匿つて貰つた。伊豆山権現は箱根権現と共に靈場
として人々の信仰を集めており伊東祐親に賄賂で
丸め込まれた前科のある箱根権現よりも信用が出
来る。熱海温泉街の少し北に熱海ビーチラインに
沿つてある伊豆神社がその場所である。伊東から
だと海岸部の直線距離で十数キロしか離れていな
いが、昔のことなので交通不便であり、追手も簡
単には立ち入れない聖地であるから、暫くは其処
に居て、それから藤九郎盛長や伊東祐清らが話を
付けて北条館に保護して貰つたのであろう。

伊東祐親に千鶴丸を殺され、妻の八重子を奪わ
れ命を狙われた源頼朝が伊東祐清の機転によつて
蛭が小島を脱出した後のことは、当然ではあるが

細部の記録が残されていない。曾我物語には伊東祐清が「北条へ御忍び候へ」と言ったように書かれているが、原本に欠字があったようで決めかねる。日本外史でも、それを真に受けて「…頼朝乃すなわち北条時政に倚る（よる）」としか書いていないが、世の中、甘くはない。源平盛衰記には「その後、北条四郎時政を相憑（あいたのみて過）し」とあるが、「…その後…」は直後では無いと思う。一旦は伊豆山権現に匿つて貰い、少し置いて北条を頼つたのであろう。幸田露伴はこの説をとっている。その当時、北条時政は京都の勤番に出向いていて留守だった。どうも、この話が伊東の場合と似ているので、気にはなるのだが…

頼朝に逃げられた伊東祐親は、暫くは荒れていたが深追いも来ず、ひたすら平家への御奉公を念頭に置いていた。したがって、数年後に頼朝が石橋山に兵を挙げた際には真つ先掛けて是を包囲した。「やはり頼朝めは、わしの睨んだとおり、危険な人物であった。あの時に北条が余計なことさえしなければ、退治できたのに、面倒なことよ…」と、自分の将来を見抜く目に自信を持って反乱軍を攻撃し、壊滅に追い込んだ。

確かに石橋山では勝つたけれども、北条氏もとより、前編で述べたように工藤、宇佐美などの伊東一族や祐親の娘たちが嫁いでいる三浦、土肥などの武士団は頼朝の許に馳せ参じている。そして祐親が自ら招いた原因で敵となった工藤祐経も頼朝の決起を知ってやって来る。藤原氏名門の流れを汲む伊豆伊東一族で、頼朝に味方しなかったのは、兄の工藤祐経を呪い殺し、甥の祐経から領地を奪い、それが原因で嫡男を死なせ、後に富士山麓での仇討騒動を惹き起こし、娘が相思相愛と

なつて生んだ孫を谷川に放り込み、二度も頼朝を殺害しようとした祐親只一人なのである。

因果応報の原理からしても此の爺さんに何らかの報いが無ければこの世は闇である。ところが、このゴウツクバリが何とも強い運勢を背負つていて、簡単にはくたばらなかつた。そして、もう一人、前編で述べたように神から与えられた任務を果たすかのように幾度かの危難を紙一重で避けてきたのが源頼朝であつた。池禅尼に助けられ、比企尼らに保護され、伊東祐清に救われた。石橋山の合戦でも、源頼朝が生き延びたのは奇跡である…と大方の史書は書いている。前編で紹介したように「平家打倒」の旗を掲げた頼朝には湘南近辺の武士たちが味方したけれども、それは大部分が中小企業、零細企業、個人経営の武士団であり装備も粗末で率いる兵力も暗算で数えられる程度しかない。名の知れた武士団は、平家に対して不満はあるが、自分が先に立つて旗を振るには未だ時期が早いと見て様子を窺っている。冒頭で述べたように誰にも明日の運命が読めないのである。

全般的な流れとしては八幡太郎義家辺りを頂点として武士団に君臨したのは源氏であり、大部分の武士団が清和源氏を主筋にしていた。ところが保元の乱を境にして平家が急速に伸び始め、平治の乱に於ける源義朝の失敗で源氏は滅亡した。武士団は生活のために平家に服従していた。その中で辛うじて一粒の種として残つた頼朝が今、芽を出そうとしている。例えば悪いが、これがモヤシで終わるのか根付くのか、そして大きく育つか…伊豆の伊東祐親は種も腐ると判断して頼朝父子を敵に回した。通常ならばそれが正解である。

しかし有力な武士団は、藤原氏を真似て公卿風

に流れる平家も長くは無いと見ていた。問題はその時期が何時なのかである。頼朝が立ったことをチャンスと見るか、今少し様子を窺うか…そういう状態で居た武士団が多かつたようで、それが結果的に劣勢であつた頼朝を助けることになった。積極的に頼朝を討とうとして石橋山に向かつたのは問題爺さんの伊東祐親と、頭の固い大場景親の軍勢だけで、後に頼朝に帰順する畠山、熊谷など東国武士団は平家の手前、頼朝討伐に出陣した振りだけしていた。関東の端になる常陸国では北部に強大な勢力を持つ佐竹氏が軍勢は出さないまでも頼朝の誘いには応じなかつた。これが源氏系の武将であつたから頼朝も攻めて来たのであろう。

佐竹氏は、八幡太郎義家の三弟で「後三年の役」に現職を捨てて長兄・義家の救援に駆け付けた新羅三郎義光を祖先としている。風流な雅楽管弦楽器である「笙（しょう）」の名手と言われるが、笛だけでなく毒も吹いたようで、美談の裏に源氏嫡流を奪うために悪辣な手段で甥を殺害し、その罪を自分の兄に着せた、と言われているから伊東祐親の様な人物だったのであろう。頼朝の系統が源氏の嫡流と言われるのは、そう言う事件で正統が変則的に伝わつたからである。「葡萄の原理」からすれば源頼朝の苦勞は祖先の因縁による。

義家は、義光の本性を知らずに死んだから後三年の役の褒美として常陸国奥久慈の領地を義光に与えた。義光はそれを長男の義業（よしなり）に伝えた。それが佐竹氏の始祖である。義業の弟は義清と言い、母親は大掾一族の鹿島氏であつたと思われる。父親の意図もあつて那珂川北岸の武田郷に進出して周辺を開拓した。その度、過ぎて近隣の吉田神社領や鹿嶋神官領を侵略し、トラブ

ルになって甲斐国に流されて来た。

甲斐国は、義光の祖父・頼信が国守に任命された途端に下総国で平忠常の乱が起り、頼信が急遽、常陸介を命じられ騒動を解決した国であるから源氏には縁が有る。義清は流されて来たのに富士川の流域で甲斐国では最初に開発された荘園とされる市川荘の荘司となり其処を拠点として甲斐の国に勢力を広げ出した。義清の子は清光であり八ヶ岳山麓地方の北巨摩方面にも進出した。清光は母親が隣国・上野の事実上の国司である上野介の娘と言われるから、その威光もあって有力荘園の荘司を務めるようになった。

清光には多くの男児が居たようで、いわゆる「甲斐源氏」として逸見、武田、加賀美、安田などの諸氏と、そこから分かれた一条、板垣、小笠原、南部などが甲斐一国ではあるが、強力な武士団を形成していた。この氏族は平家や源氏や伊豆伊東氏などと違って一族が醜い潰し合いをすることも無く、明日の運勢が分からない中で余計なことはせず、じつと力を蓄えていた。甲斐の国は東国に含まれるが、常陸国と同じく僻地のような存在であるから源氏や平家が権力を握っても適当な間隔でお付き合いをし置けば潰されもせず、主家の興亡に左右されないで済む。

甲斐源氏・清光の長男は逸見氏などの祖となる光長であったが、武田を称した次男の信義が嫡流として中心的存在になる。戦国時代に「川中島の合戦」などで知られた武田信玄は、信義から十数代の子孫である。「武田」の名称について地元の史料は韮崎市の武河荘武田からとしているが、新編常陸国誌には常陸三之宮である吉田神社に関わりのある勝田市武田が甲斐武田の出身地とする説の

あることを記しており、那珂川北岸に定着した経緯からしても名称を常陸国に由来することに不自然さは無い。なお、幕末に天狗党の総裁として越前敦賀に殉じた武田伊賀守（耕雲齋）は、甲斐武田家の血筋である。徳川家康は滅亡した武田の遺臣を再雇用して紀州藩や水戸藩に配置している。

戦国ドラマなどでは必ず甲斐武田家に源氏のシンボルである「御旗・無楯の鎧（みはた・たてなしのよろい）」が伝わる……と簡単に言っているが、源氏の本流は源頼朝であるのに、なぜ武田なのか……日本外史には「……義光の子・義清、武田冠者と称す……伯父義家の旗、及び無楯の鎧を伝ふ……」と書いてあり鎧のほうは源家八甲、つまり源氏に伝わった八領の鎧の一つであるから甲斐に在っても良い。旗のほうは、本来は八幡太郎義家の旗で、多分、源氏の白旗に日輪が付いていたのだと思われる。同族の佐竹氏は白旗だけを使っている頼朝に怒られ、軍扇を付け足した。義家の系統が滅びた（先に述べたように義光の策謀により滅ぼされた）から、それを義光が勝手に自分の旗にしたのであろう。先祖のことは兎も角（後に、その因果で甲斐源氏に報いが来るのだが……）武田信義を中心とした甲斐源氏は一国を一つに纏めた勢力として源氏、平家両方から期待されていた。

治承四年（一一八〇）八月十七日に伊豆で兵を挙げた源頼朝らの集団は、僅か一週間で完敗して隠れる場所さえ無く、散り散りに房総半島などへ逃げた。息を吹き返したのは安房、上総、下総などに居た桓武平氏系の豪族たちが味方に付いてくれたから、というのとは何とも皮肉な話であるが、それとは逆に、各地で不穏な動きがあるようになり特に東国が危ない状態の中で平家が頼りにした

のは甲斐国に固まっていた義光流の源氏らしい。これを何とか頼朝側に付けるように、北条時政と息子の義時が現地へ出かけて口説き回ったから武田信義の決断で源氏への味方が決定した。これに石橋山で敗れ甲斐国に逃げ込んでいた頼朝系武将の一部が加わる。それらの兵力を合わせると大きな戦力になる。これが治承四年の九月頃である。

一方、甲斐源氏を当てにしていた平家側には大きな痛手であり、断られた恨みがあるから、前編で述べたように源平両軍が富士川で対峙した際に暗黙のルールに反して、甲斐源氏の軍使を平家側が斬ってしまった。それが原因で平家の軍が理由も分からず敗れるのだがこれは自業自得である。

この章のテーマである「因果応報の範囲」から見ればこの時に平家軍がとった「軍使殺害」の報いは、やがて有名な「一の谷の合戦」で本格的に平家軍に降りかかってくる。人道もルールも無い現代の殺戮戦争と違い、ある程度は「約束ごと」に基づいていた武士の合戦での「裏切り」は、それにより、もたらす結果が重大なのである。

富士川で源氏方の軍使を斬った平家への報いは「振り込め詐欺」の逆のような形で仕組まれた。

これを「閉じ込め詐欺」という。寿永三年（元暦元年・一一八四）二月六日のこと、平家一族は主力の軍勢を一の谷に置き、福原の都（神戸）では平清盛の三回忌法要を営んでいた。そこへ後白河法皇の近臣で修理権大夫が使わした使者と称する人物がやって来て一通の文書を置いていった。それには「……源氏と平家の和解平和交渉を行うため、法皇の代理として私が二月八日に京を出立してそちらに向く。和平交渉中は全ての合戦は中止するよう源氏に命令した。よって平家方も、そのことを武士、

兵士に至るまで徹底して知らせて置くように：」
という趣旨のことが記されていた。

平家方は、この書状を信じて全軍に休戦のことを周知徹底させた。ところが、二月七日に突如として源氏の軍勢が福原近辺から一の谷近くへ押し寄せてきた。平家軍は「休戦条約」を守っていたから大混乱に陥り多くの損害を受けて結局は屋島へ退くことになった。この卑怯な作戦は怪物と言われた後白河法皇が「平家を早く潰すため」自分で立てたものと言われる。武士が名誉を賭けて戦う場面に国家の中枢に位置する人物が道義に反する計画で加わってくる―これ以後、日本は権力が幻想で国民を騙すことが恒常化する国になった。

一方の平家も、源氏に追い落とされている現状の危機が理解出来ずに、権威主義の馬鹿行事とも言える叙位除目（じよいじもく＝官位・官職の示達）を行っていた。この時に清盛の異母弟に当たる教盛（のりもり）が中納言から正二位大納言になったのだが、壇ノ浦で海に沈む運命を予感していたように任官を辞退して次のような歌を詠んだ。

「今日までも あればあるかの 我が身かな
夢のうちにも 夢をみるかな」：屍（しかばね）

となつて動いている自分が、位階を賜るといふのは夢の中の夢である：気の毒なくらいに心境が分かる歌であり、平氏はどこまでも優雅だった。

これを攻める源氏とは言え誰もがなりふり構わずに合戦のことしか頭になかった。一の谷は摂津国にあるが隣国の丹波国に近い。その三草山に陣を張った平家軍を攻める源氏は西の山麓に布陣した。既に日が暮れている中で開かれた作戦会議では参謀の土肥實平が「夜討ち」を主張した。周りの者は「この暗闇で：」と呆れていたが、大将

の源義経が「：例の大松明（おおたいまつ）ではどうか：」と言い、實平が気付いたように膝を叩いて承知し、夜討ちが決行されたのである。

その「大松明」というのは、平家の陣に至る間の道筋に点在する農家や山野に火をかけて照らすというもので源氏の軍勢は容易に敵陣に達したけれども、これにより多くの地元民が突然に家屋・家財を焼かれた。これこそ悪魔の所業であるが、義経と家臣との会話から、この焼き打ちが他の場所でも行われていたことが推測される。その因果応報によって源義経は数々の武功を立てながらも頼朝に見捨てられ悲惨な最後を遂げるのである。なお、一の谷の合戦の延長線上で行われたのが冒頭に紹介した熊谷直實父子と平山季重の先陣争いであり、彼らのような古武士は、合戦でも奇策を弄さずに正々堂々と戦っている。

話を甲斐源氏に戻すと、この一族は源頼朝の意向を受けた北条時政に味方して先ず富士川の合戦で平家軍を破り、その後も源氏軍の有力な一団として京都に進駐し一の谷や壇ノ浦など源平合戦史上で有名な戦闘にも参加している。甲斐源氏の盟主は武田信義であったが、その嫡男である一条次郎忠頼は優れた武将で人望も有り甲斐源氏のシンボリックな存在であった。

甲斐の隣国である信濃国の西南部・木曾では頼朝の従兄弟に当たる木曾義仲が以仁王の令旨を受けてその気になり早々と平家を都から追い出したけれども、粗暴の振る舞いがあつて後白河法皇に嫌われ、また自尊心の強い頼朝より先に平家追討の実績を上げたために悪者にされてしまった。世の中は何事も程々が良いので早過ぎてもいけない。その木曾義仲軍との戦いに一条次郎忠頼が率いる

甲斐源氏は著しい功績を上げている。大将も立派だが甲斐の武士団も強かったことになる。これもまた、程々が良いので評判が良くて強すぎると、有らぬ疑いを掛けられることになる。

それでなくても猜疑心と嫉妬心が強い源頼朝が、同族の源氏で自分よりも立派な人物が率いる強い武士団を放っては置かない。石橋山時代なら強い味方が欲しかったけれども、平氏が西に落ちて行き、目障りな木曾義仲が居なくなったから、甲斐源氏の力を少し弱め、自分の手足になる武士団にするため、一条忠頼の暗殺を図った。

平家軍が「閉じ込め詐欺」にあつた元暦元年の六月十六日に、頼朝から招待された忠頼は鎌倉に造られた営舎に赴き西の詰所に昇殿して頼朝に対面した。十人程の有力武士が同席しており、襖の向こうには大勢の警護の侍が詰めているようである。張した雰囲気であるが忠頼に隙がない。酒肴が運ばれて献盃の儀が始まり、側近に侍している工藤祐経が銚子を持って頼朝に酌をし、それから忠頼の前に来たけれども顔色が良くない。それを見て小山田別当有重という高齢の武士が「：かような酒の酌は、それがしのような老人の役目でござる：」と言いながら、祐経から銚子を受け取って忠頼の盃に注ぎ、息子である二人の武士に目くばせをして別な盃や肴を運ばせた。有重は二人の息子に「：配膳をする場合は故実により袖をくくるものである：」などと言ひ聞かせ、自分でも袖をくくったりしていたので、忠頼もそれを見ていたから僅かながら隙が出来た。

その時に頼朝から目くばせされた天野藤内遠景が、そつと太刀を持って忠頼の左に回り「御上意である！」と叫んで斬り付けた。頼朝は無関係の

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けても
らい、自分の風を「ふるさとの風景」に
唄ってみませんか。

オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ち
の方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

ような顔で座敷から消えた。この時に忠頼の家臣が三人、殿舎の階段の下に控えており物音に気付いて階段を駆け上がった。この三人は列座の武将たちに怪我をおわせたけれども、駆け付けた警護の者に斬られてしまった。慌てた頼朝の家臣たちは、同志討ちもしたようである。

戦時色が濃かった時代に書かれた史書には「二条忠頼の」武功も少なくなかったが、源氏の流れを汲むというので家柄を誇り、威勢を頼んで、とかく安心がならない。「ために被害された、と書かれているが、コジツケであり、前編でも触れたように上総介広常と源範頼と一条次郎忠頼の三人は何の罪も無く頼朝の邪推で殺されたのである。

この暗殺で興味深いのは工藤祐経の態度である。初めの予定では、工藤祐経が忠頼を斬る役目であったらしいのだが、祐経は武士でも風雅な人物であったから野蛮な暗殺には向かない。

その祐経は九年後に富士の裾野で一族の曾我兄弟に討たれるのだが、個人的な推論で言えば一条次郎忠頼と工藤祐経と源頼朝は、或る不思議な因縁で結ばれている。目に見えない糸が祐経に忠頼を斬らせ無かったのであろうと、勝手に思っているが、これで甲斐源氏は完全に頼朝に屈伏した。この物語は先が長いので、この三人組にはいづれセットで登場して貰うが、平家追討の重荷を抱えていた頼朝が、なぜ同族の木曾義仲を平家同様に追討したのか、因果・因縁が絡む事情があるので次号にて触れておくことにする。

【風の談笑室】

《11月は座だよん》

11月の定期公演は、筑波山の唄歌をモチーフに、「筑波嶺の峰より落しるみな川」のひびきもりて淵となりぬる」の歌を物語り化した「湖の弦音」を演じます。そこで「唄歌」についての基礎知識のようなものを少しお話ししましょう。

筑波山の唄歌というところから自由恋愛だとか男女交歓のことばかりを言われますが、唄歌とは、実は五穀豊穡を祈願する宗教的行事に深く関わりを持つものであることを忘れてはいけません。

古代の人々は、この世のものは総べて陰と陽が結び合ってつまくつまくつまえられていました。男女の性行為も産霊(むすび)の神の力を発揚させると信じられていました。産霊とは子供を産む霊力のことですが、穀物の豊作もこの産霊の神の力が大きく関係してつまくつまえられていました。そのた

め豊作の祈願では、神様の前で性的な交わりを行う事で穀物を産み出す神の力を呼び起こすことが出来ると考えられていたのです。

それが次第に様式化され、今回の舞劇の場所に設定した出島の牛渡鹿島神社で行われている「へいさんぼつ」で舞われる「平左とおかめの穂孕み」などがそれに当たります。

とは言え、唄歌は男女の出逢い、結びの場であったことも事実です。

筑波山の唄歌には、近郷近在ばかりではなく、遠く他の地からも大勢の男女、若者たちが集まってきたと言います。

さて、今月号の談笑室はことば座だよりだけの短いコーナーとなりましたが、次号には又沢山のコーナーが開けることを願っています。(ひろむ)

《ふる》の《》

ピザ・パスタ・アレンジ書架・書架会席
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「つらら」ちゃん
皆さんをお迎えいたします。

電話0299-470-0888

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaize.com/>

ことば座 ギター文化館発 「常世の国の恋物語百」 第29話

「湖^{うみ}の弦音^{げんね}」

ことば座第21回定期公演 11月11日～13日（午後3時開演）

筑波嶺に逢はむといひし子は 誰が言聞けば神嶺あすばけむ

常陸国風土記にも記載され、万葉集にもその歌が載せられている筑波の耀歌。

産霊の霊力を高めるための宗教的行事であった耀歌をモチーフに、

『つくばねの峰より落つるみなのかほひぞつもりて淵となりぬる』の歌に唆されて、霞ヶ浦は三叉沖を男女の川(恋瀬川)と桜川が交わり深場となったことから恋が淵という、の他愛もない発想から万葉の若き男女の恋物語を創作。

大島直が演奏するクラシックギターをバックに、
手話舞の**小林幸枝**が**万葉の恋を舞う**

脚本:演出:朗読・白井啓治 朗読舞・小林幸枝 ギター演奏・大島 直
舞台背景画・兼平ちえこ 舞台装美・小林一男

入場料3000円（小中学生1800円）入場券はギター文化館にて取り扱っております。

ギター文化館 電話 0299-46-2457 Fax0299-46-2628

※11月12日、13日は14:00～14:30 ことば座朗読教室の発表会(入場無料)を行います。
朗読兼平良雄「平家物語(巻十一、第百三句) 讒言梶原」

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

☎ 0299-24-2063 Fax 0299-23-0150

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

- ◎募集要項 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
募集人員：5名程度 ※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
養成期間：1年間（入塾は随時受付しています）
指導月4～6回
受講料：月額20,000円（全・半納割引有り）
※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当:白井)までお問い合わせください。